

# 山賀遺跡発掘調査概要

一付 弥刀・瓜生堂・縄手・若江遺跡発掘調査概要一

1990

東大阪市教育委員会

## は　し　が　き

東大阪市内には、100カ所以上の遺跡・古墳群など多くの埋蔵文化財があります。特に、生駒西麓は、遺跡の宝庫とも呼ばれるほど濃密な地域であります。

この多くの遺跡の中には、小学校・中学校をはじめとする教育施設が遺跡の範囲内に入っているところが少なからずあります。いうまでもなく、埋蔵文化財は我達の祖先が残した歴史遺産であり、保護・活用をはかりながら、後世に伝えなければならない貴重なものであります。しかしながら、公共の目的のため、また他にどうしても代替地などがない場合、遺跡内で建設工事を進めなければならぬ時があります。この場合、本市教育委員会では、他の関係機関と十分な協議をおこないながら、事前の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、過去実施いたしました教育施設内での発掘調査の成果を一冊にまとめたものであります。中には、山賀遺跡のように調査前には、遺跡の存在も明確でなかったところで、弥生時代前期の遺構・遺物を検出したのをはじめ、縄手・弥刀遺跡のように從来の調査に新らたな知見を加えて、さらに詳細な実態を解明した調査もあります。

今回、これらの貴重な成果を報告しますとともに、この成果を今後の文化財行政に役立てていきたいと考えています。また、本書が広く市民の方々にもご利用いただけましたら、幸いります。

最後に、現地調査の実施にあたって、ご協力をいただきました市民の方々、関係機関に厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

東大阪市教育委員会

教育長 下村善博

## 例　　言

1. 本書は、東大阪市教育委員会内に組織した山賊遺跡調査団及び教育施設内遺跡調査団が実施した発掘調査概要報告書である。

2. 各調査の期間は下記のとおりである。

山賊遺跡発掘調査…………昭和53年9月4日～12月23日

弥刀遺跡第4次調査…………昭和56年9月7日～10月3日

瓜生堂上層遺跡調査…………昭和56年8月20日～9月5日

縄手遺跡第8次調査…………昭和55年4月7日～5月10日

若江遺跡第19次調査…………昭和55年10月7日～10月23日

弥刀遺跡第3次調査…………昭和53年10月10日～11月2日

3. 本書の執筆は、調査分担に従い、本文目次に掲げる通りである。現場写真は各担当者が撮影し、遺物写真については、富士カメラに委託し、及川雅文氏のご協力を受けた。

# 本文目次

## はしがき

## 例 言

I.	山賀遺跡発掘調査報告	(下村)	1
1.	調査の経過と遺跡の立地		1
2.	調査の概要		2
3.	出土遺物		7
4.	まとめ		20
II.	弥刀遺跡第4次調査報告	(原田)	21
1.	調査の経過		21
2.	調査の概要		21
3.	検出の遺構		23
4.	出土遺物		25
5.	まとめ		29
III.	瓜生堂上層遺跡調査報告	(原田)	30
1.	調査の経過		30
2.	調査の概要		30
IV.	縄手遺跡第8次発掘調査報告	(勝田)	33
1.	調査に至る経過		33
2.	位置と環境		34
3.	調査の概要		36
4.	出土遺物		39
5.	まとめ		44
V.	若江遺跡第19次発掘調査報告	(勝田)	45
1.	はじめに		45
2.	調査の概要		46
3.	出土遺物		47
VI.	弥刀遺跡第3次発掘調査報告	(芋本)	49
1.	調査に至る経過		49
2.	調査の結果		49

# I. 山賀遺跡発掘調査報告

## 1. 調査の経過と遺跡の立地

山賀遺跡は、東大阪市若江南町5丁目から八尾市新家町にかけて所在する。遺跡の発見は、昭和46年の楠根川改修工事によって大量の土器や石器が出土したことに始まり、その後昭和54年から始まった近畿自動車道路建設に伴う調査によって、縄文時代から中近世まで続く大規模な複合遺跡であることが知られるようになった。これまでの調査で、本遺跡は河内平野でもっとも早く水田がひらかれ、弥生時代の前期後半には大規模な溝状遺構、中期には掘立柱建物や方形周溝墓がつくられるなど河内平野の拠点的な集落であったことが明らかになった。古墳時代に入っても、6世紀代の方形墳が築造されるなど以後も集落が続いていることがわかる。

本遺跡の周辺には、北から瓜生堂・巨摩・若江北遺跡が続き、八尾市域に入って友井東・美園・佐堂・久宝寺・龜井遺跡が発見されている。河内平野中央部に展開するこれらの遺跡群は、本遺跡を含めてたがいに密接な関係があり、今後総合的に検討されなければならない課題が多い。

昭和52年東大阪市教育委員会では、若江地域の生徒増に対処するため、若江南町5丁目345地番他に市立中学校新設計画をおこない、用地買収を開始した。当時は、近畿自動車道内の調査もおこなわれておらず、遺跡の性格・範囲は明確でなかったことから、市教委ではまず試掘調査を実施することになった。試掘調査は、昭和53年3月13日～3月21日まで実施され、その結果、古墳時代・弥生時代の2時期の遺構面を検出し、予定地が山賀遺跡の範囲内であると確認された。市教委では関係機関と遺跡の取り扱いについて協議をおこなった結果、校舎など建築



第1図 遺跡位置図

工事によって遺構が破壊される地域について全面調査を実施することになった。

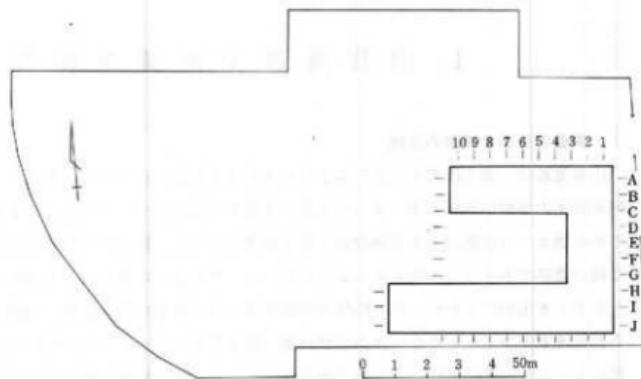
調査は、東大阪市教育委員会内に山賀遺跡調査団を組織し、昭和53年9月4日～12月23日まで実施した。

## 2. 調査の概要

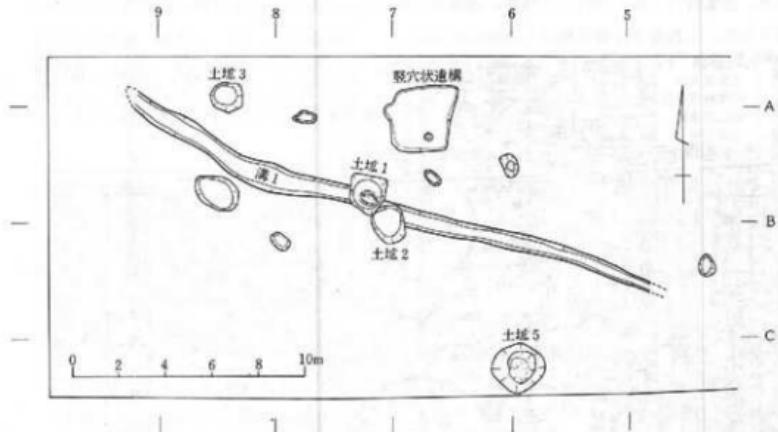
### 1) 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構面は、旧表土下1.2～1.5m、第4層上面をベースとしている。後世の削平を受けているため、遺構の全体像は明確でない。今回の調査では、竪穴状遺構1カ所、土塙6カ所、溝2条を検出した。

竪穴状遺構 6B地区で検出した。東西2.4m、南北2.8mではほぼ方形状を呈する。壁面の残存高5～9cmで、内部からは、径30cm、深さ20cmのピット1カ所を検出したのみで、溝・炉跡などは検出できなかった。



第2図 調査地点位置図



第3図 古墳時代の遺構配置図

土塙1 溝1中央部で、溝1を切って検出した。1辺1.5m、深さ0.5mの方形の掘形内に半載の丸太を棒り抜いた棒を円形に合わせて井幹としている。内部より、布留式の甕が出土している。

土塙2 土塙1の南に接して検出した。切り合い関係より、土塙1に先行すると考えられる。堀形は、長辺1.7m、短辺1.4mを測る卵形を呈し、地表下45cmで段がつく二段堀である。底面は、径約50cmの円形を呈する。底部から、土師器甕（第10図6）の完形土器と体部が出土した。

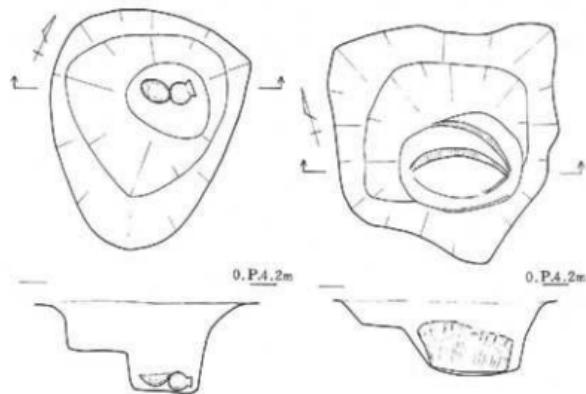
土塙3 調査地の北側で検出した。南北1.4m、東西1.3mの歪な方形状を呈し、深さ0.35mで皿状に凹んでいる。底部中央で土師器甕1個体分が土圧で押し潰された状態で検出した。

土塙4 ロの字状の調査地の中央部分で単独で検出した。堀形は、長辺70cm、短辺60cmの橢円形を呈し、深さ40cmではまっすぐ掘り込まれている。内部から甕（第10図2・3）や口縁欠く甕2個体分が出土した。埋土には、炭が多量に含まれていた。

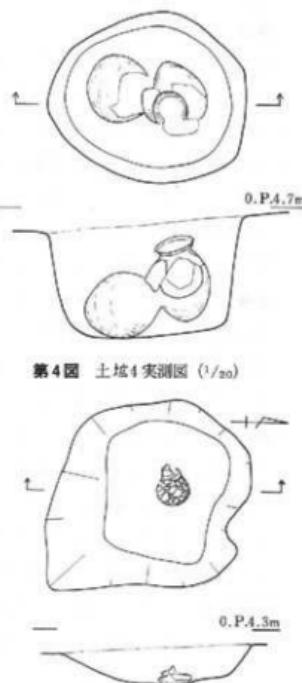
土塙5 北側調査地の中央部南端で検出した。堀形は、径2.4mの円形を呈し、深さ0.56mを測る。図版七・Aの小型丸底甕が出土した。

溝1 北側調査地の中央で検出した。幅0.3~0.6m、深さ0.1~0.2mで延長約24mを検出した。

溝2 調査地南側で検出した。幅1.0~1.2m、深さ0.2で南北方向に認められる。溝2内から、第11図12~18・20・27・28の土器が出土している。



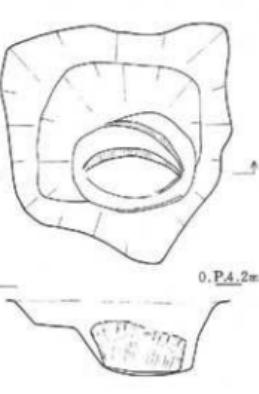
第6図 土塙2実測図 (1/40)



第4図 土塙4実測図 (1/20)



第5図 土塙3実測図 (1/40)



第7図 土塙1実測図 (1/40)

## 2) 弥生時代の遺構

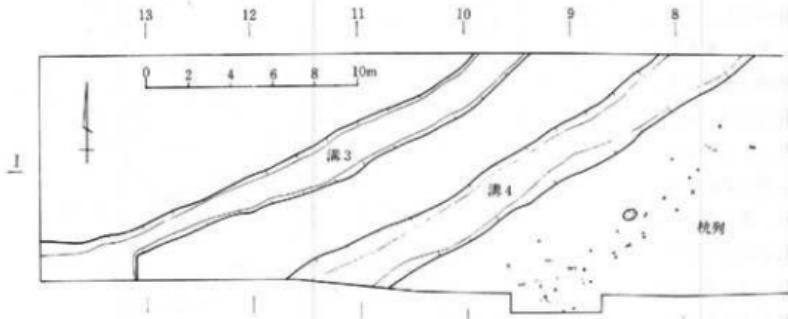
**層位** 調査地内の層位は、大きく20層に分層できる。第4層が古墳時代の遺構面を形成し、上層に第3層淡褐色砂質土の包含層が認められる。3層は、後世に削平されており、一部で認められたのみである。50~60cmの間層において第8層黒色粘土に至る。8層は、植物遺体を多量に含み、弥生時代後期の長頸壺(23)が1点出土したが、その他の遺構・遺物は検出できなかった。8層以下では、調査地西半分で自然流路が認められ、下部は弥生時代前期の包含層を削り取っている。東側では前期の包含層が比較的よく残されており、北東端で4層に分層され、層厚も1.2m以上を測る。19層黒色粘土は、調査地全面に安定した状態で検出され、縄文時代晩期のベース面と思われるが、遺物は認められなかった。

**遺構** 弥生時代の遺構は、盛土状遺構2、畦畔状遺構1、溝2、杭列などを検出した。

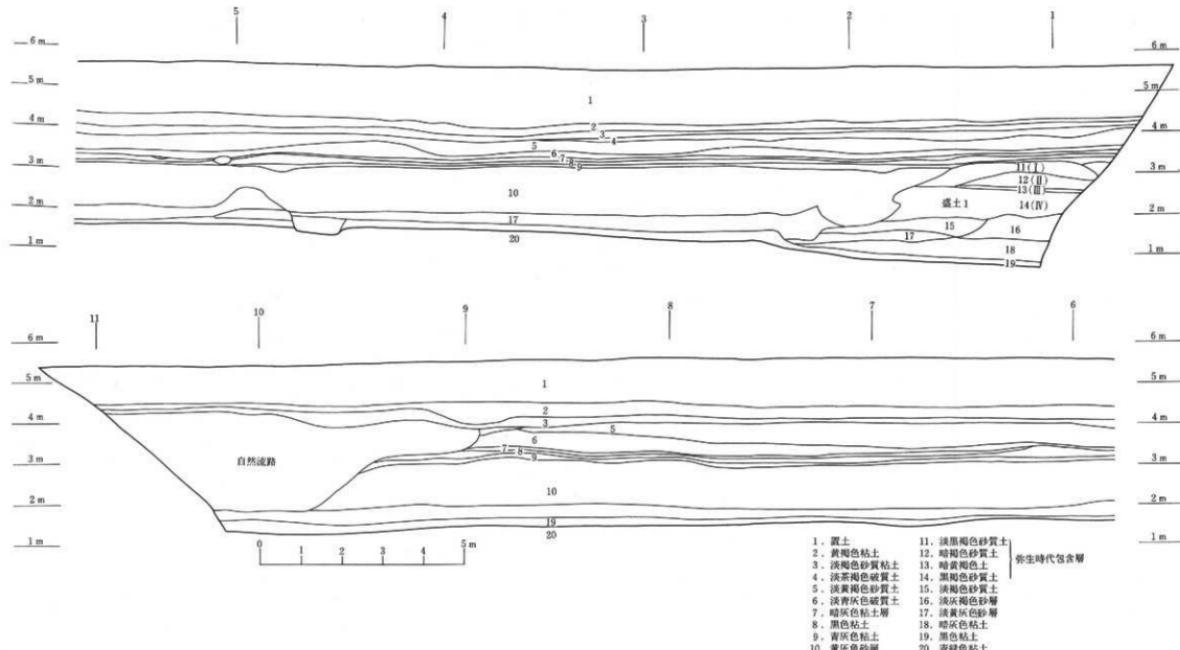
**盛土状遺構** 調査地北東隅で検出した。盛土は南北2カ所検出した。検出した当初は、方形周溝墓のマウンドの可能性も考えられたが、主体部等の施設も検出できず、性格は明らかにできなかった。北側の盛土は、北半分以上がトレンチ外へ続いている。現状で高さ1.2mを測り、4層に分層ができる。いずれの層からも、大量の弥生土器が出土し、特に最下層の14層からの出土が顕著であった。今回の調査で検出した前期の土器の大半が盛土中から出土したものである。南側の盛土は、高さ0.8mを測り、さらに東側へ続いている。盛土と盛土の間は、溝状に凹み、淡青灰色砂質土の細かな砂で埋まっている。西側の盛土は、黒褐色砂質土で分層はできない。盛土内から大量の弥生前期の土器が出土した。

**畦畔状遺構** 5A~C地区で南北にびる畦畔状遺構を検出した。上幅0.8m、下幅1.9m、高さ0.5mを測る。遺構は、黒色粘土層をベースにして下層に黒色粘土、上層に暗灰色粘土を盛つてつくられている。下層より少量の弥生土器片を検出した。

**溝3・4** 8I~13J地区で検出した。溝3・4とも北東より南西方向に約3m間隔で併行して流れている。溝3は、幅2.0m、深さ0.4mを測り、南端で大きく広がっている。溝4は、幅2.3m、深さ0.4~0.5mを測る。両溝とも逆台形の断面を呈し、出土遺物は少ない。



第8図 弥生時代溝・杭列実測図



第9図 調査地北壁断面実測図

杭列 溝4の東側肩から約3m離れて、溝に沿って杭列が認められた。杭は、径10cm前後のものが不規則に認められた。検出した杭は、総数29本検出した。杭にひっかかる状態で自然木が数本認められた他、柱穴1カ所を検出している。

### 3. 出土遺物

今回の調査では、古墳時代の土師器（コンテナ5箱分）、弥生時代の土器（コンテナ15箱分）石器・木器・土製品が大半を占め、中世の瓦器片、縄文時代の突帯文土器（2点）などが検出された。

#### 1) 古墳時代の土器（第10・11図）

古墳時代の土器には、小型丸底壺・器台・鉢・甕などが出土している。甕には丸底で球形の体部にくの字に外反する口縁部に端部を肥厚するもの（甕A）と口縁端部を上方につまみ上げ、端部に面をつくる（甕B）とがある。甕Aは6のように小型のものと1・3のように大型のものに分けられる。甕Bにも4のように小型のものと2のように大型のものに分けられるが、小型のものが圧倒的に多い。甕Aは、所謂布留式に属し、甕Bは生駒西麓産の庄内式に属している。

小型丸底壺・器台・鉢の所謂小型精製土器は、出土量は少ない。9は、完形の土器で、溝2から出土し、体部下半に径5mmの孔を穿っている。

#### 2) 弥生時代の遺物（第12～24図）

弥生時代の土器は、少量の中期・後期の土器が出土しているが、大半は前期の土器である。

##### 後期・中期の土器

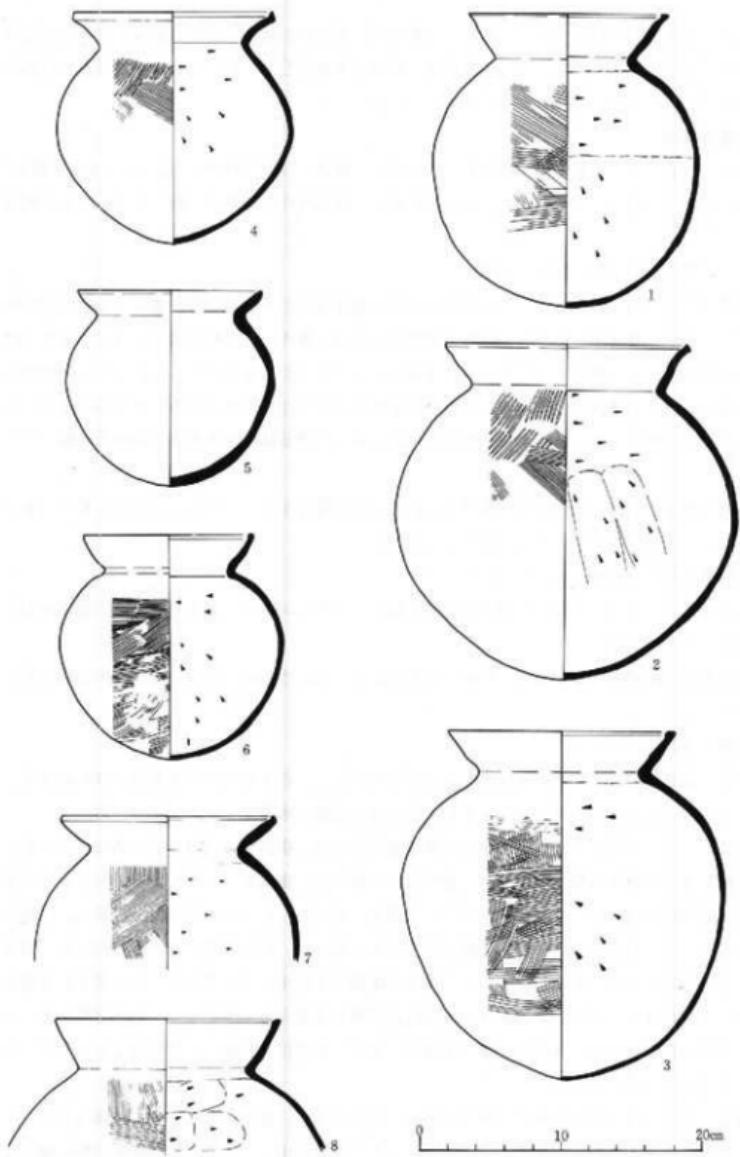
23は後期の長頸壺で第7層から単独で完形で出土した。その他の土器は第3層中からの出土である。

##### 前期の遺物

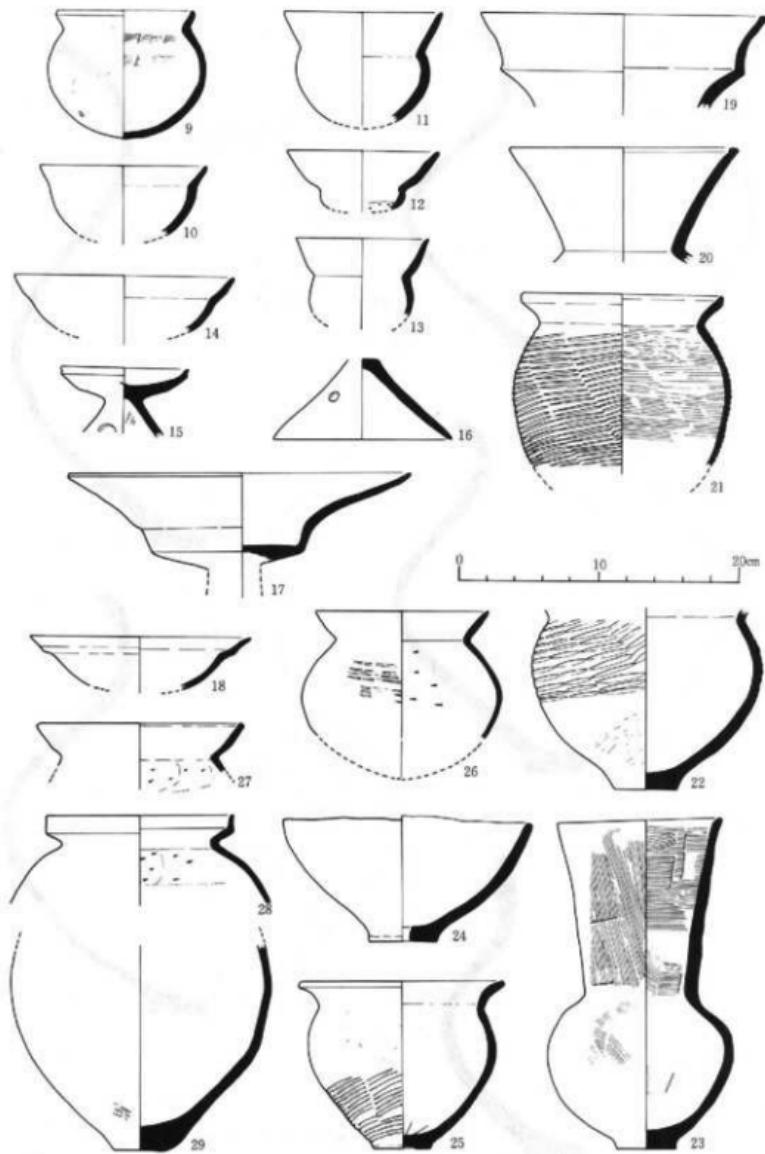
前期の遺物は、大半が盛土状遺構1・2から出土した。弥生時代の出土遺物のほとんどは、前期のものに限られる。遺物は、大半が土器で他に石器・木器が少量出土している。

土器 完形を含めて、器種を確定できる破片総数は、壺165点、甕479点、鉢48点であり、その他に壺用・甕用の蓋少數がある。比率的には壺23%、甕67%、鉢7%、その他3%となる。壺は、頸胴部に段をもつもの40、削り出し突帯をもつもの30・37・39、削り出し突帯上に沈線を配するもの38・44・45・46・49、沈線文をもつもの33・48、貼付突帯をもつもの32・42・43及び無文のものに分けられる。削り出し突帯上に沈線文を配するタイプがもっとも多く、条数も2条～5条が多い。34は、田の字状の割付内に無輪の木葉文3カ所施文し、全周は描いていない。大型の壺50～52は、頸部に3条の沈線文、胴部にも沈線文を配し、内外面ともヘラミガキで丁寧に仕上げられている。

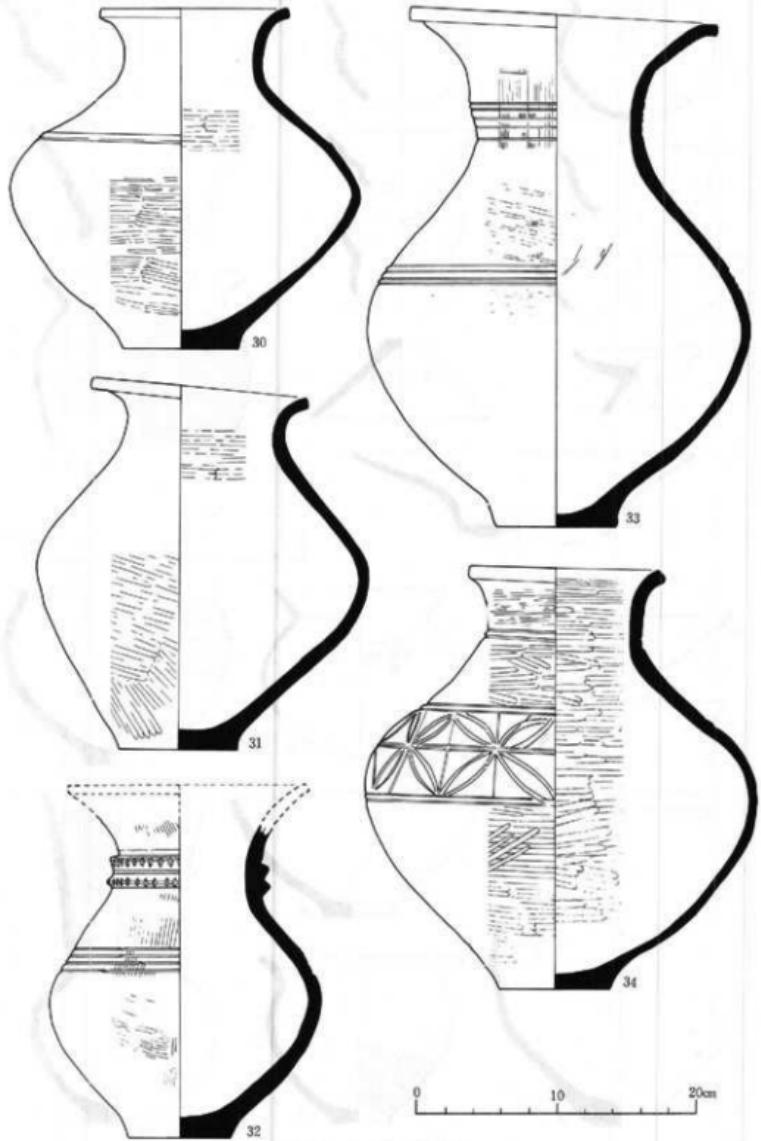
甕は、短く外反する如意形の口縁部をもち、端部に刻目、頸部に3～5条の沈線文をもつものが圧倒的に多い。口縁部が逆L字形を呈するものも3点出土している。頸部無文様の甕は、127点で全体の26%を占める。頸部沈線の条数は、3条55点、4条32点、5条27点、以下2条、



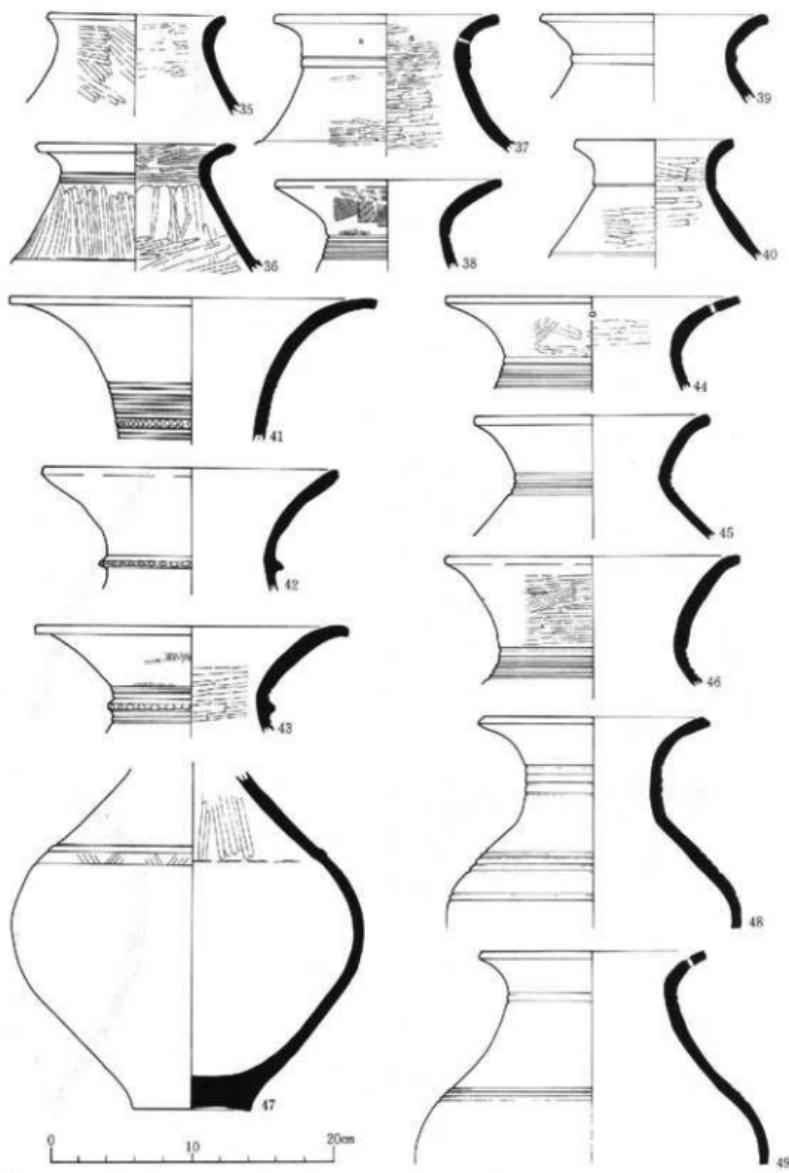
第10図 古墳時代の遺物 1



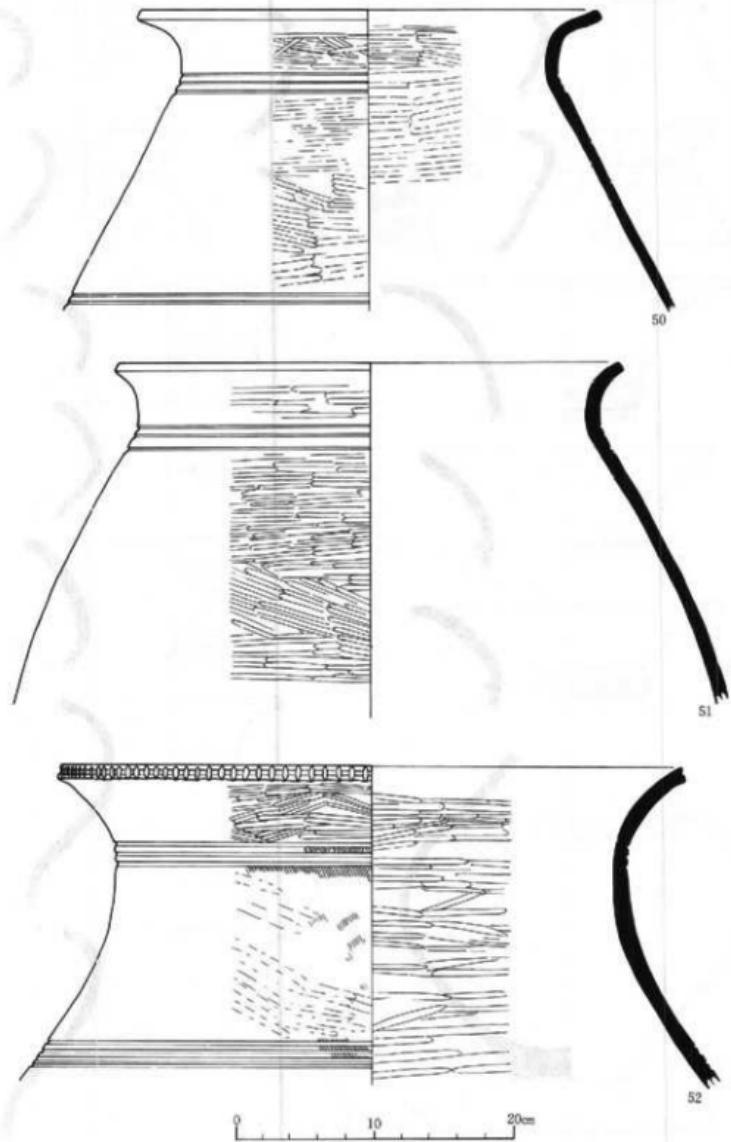
第11図 古墳時代の遺物 2



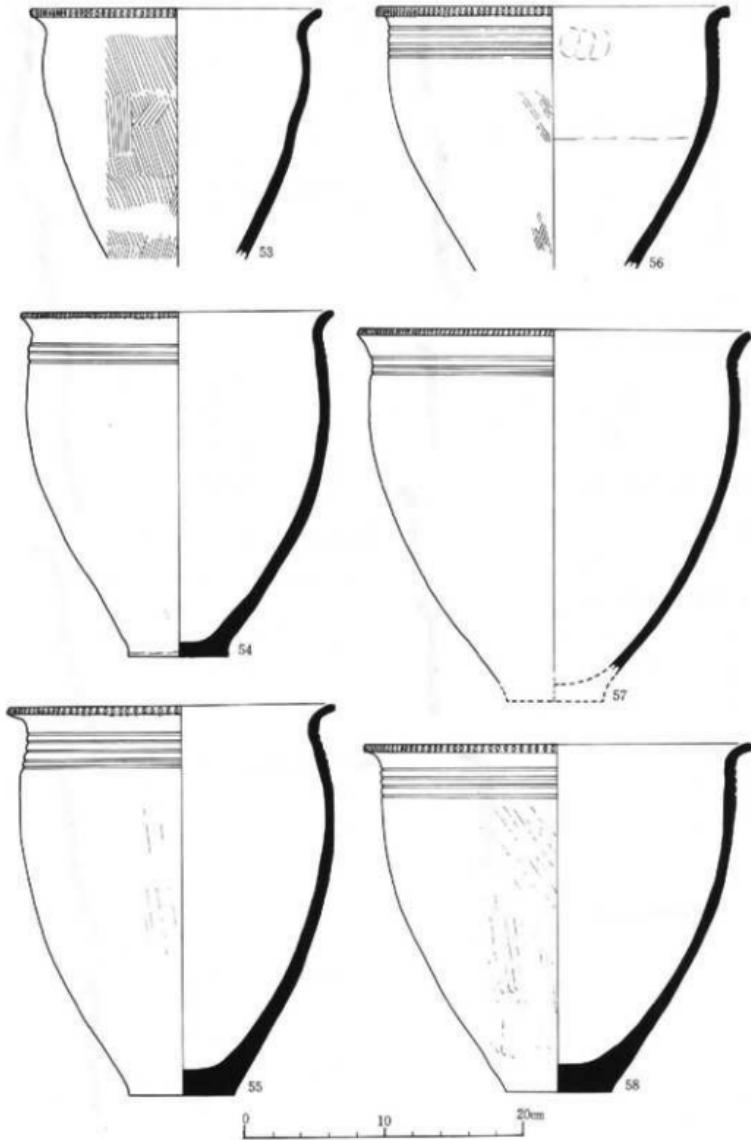
第12図 弥生時代の遺物 1



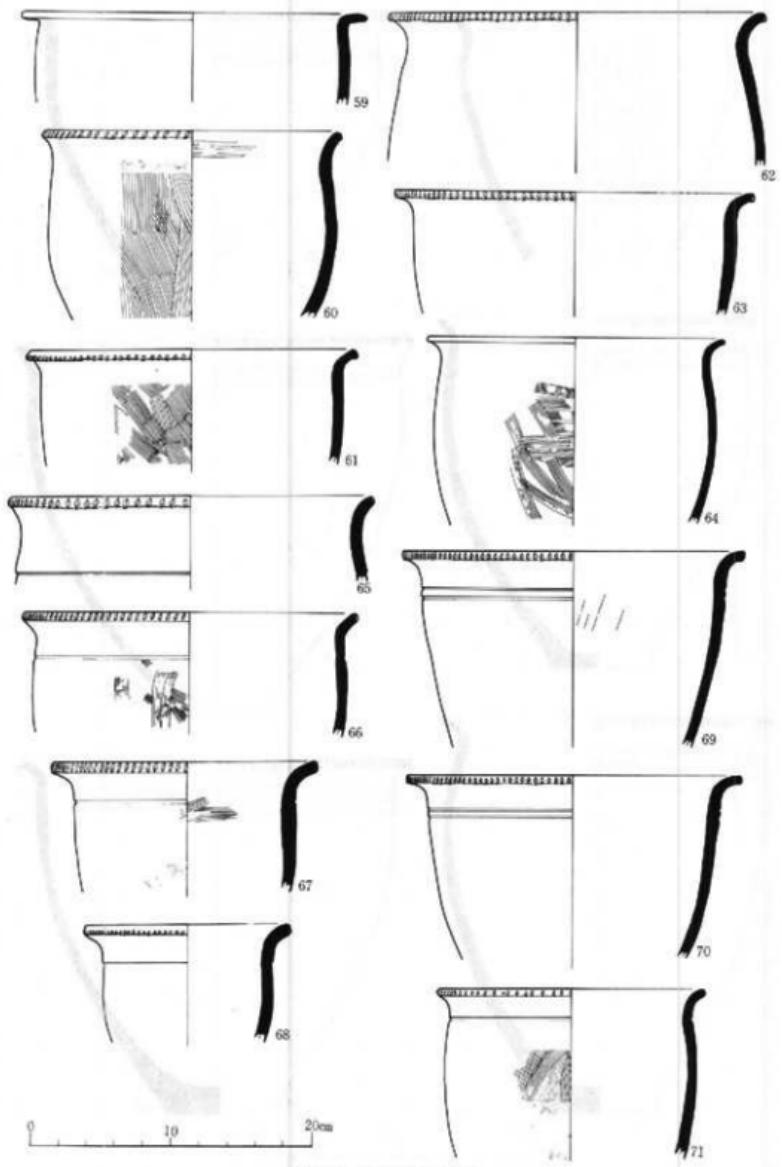
第13図 弥生時代の遺物 2



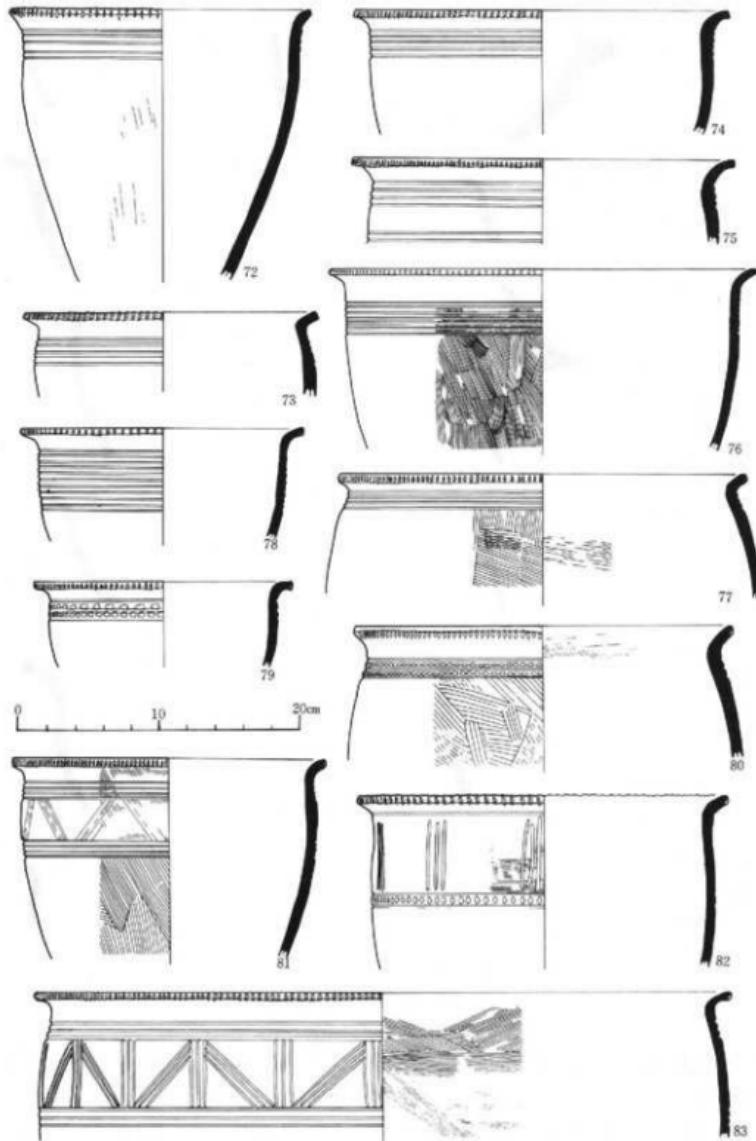
第14図 弥生時代の遺物 3



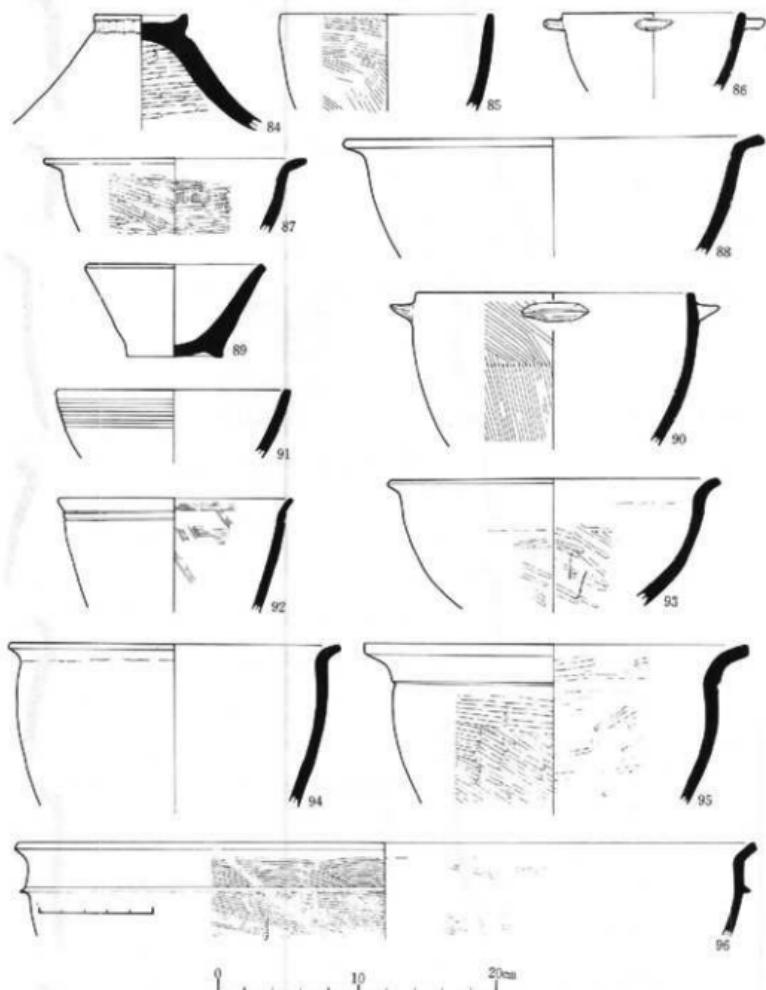
第15図 弥生時代の遺物 4



第16図 弥生時代の遺物 5



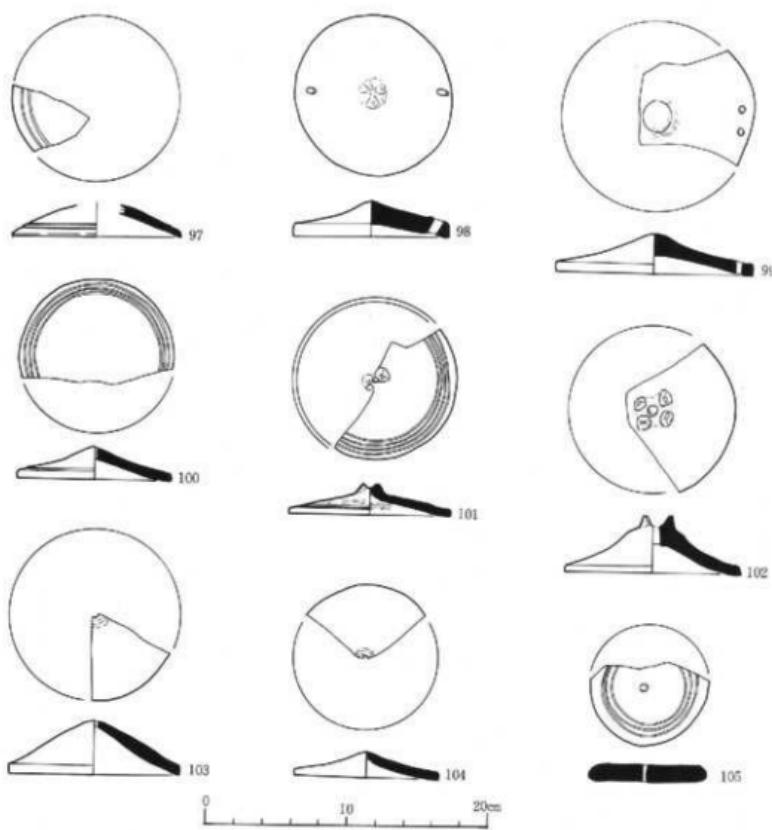
第17図 弥生時代の遺物 6



第18図 弥生時代の遺物7

6条、7条と続き、11条のものも2点含まれている。その他、平行斜線・刺突文を施すものも少數ある。

鉢にも瘤状の把手をもつもの86・90、段をもつもの95、突帯をもつもの96など多彩である。91は、ヘラ描きによる沈線文7条を配し、II様式に属するものかもしれない。蓋は、壺用の

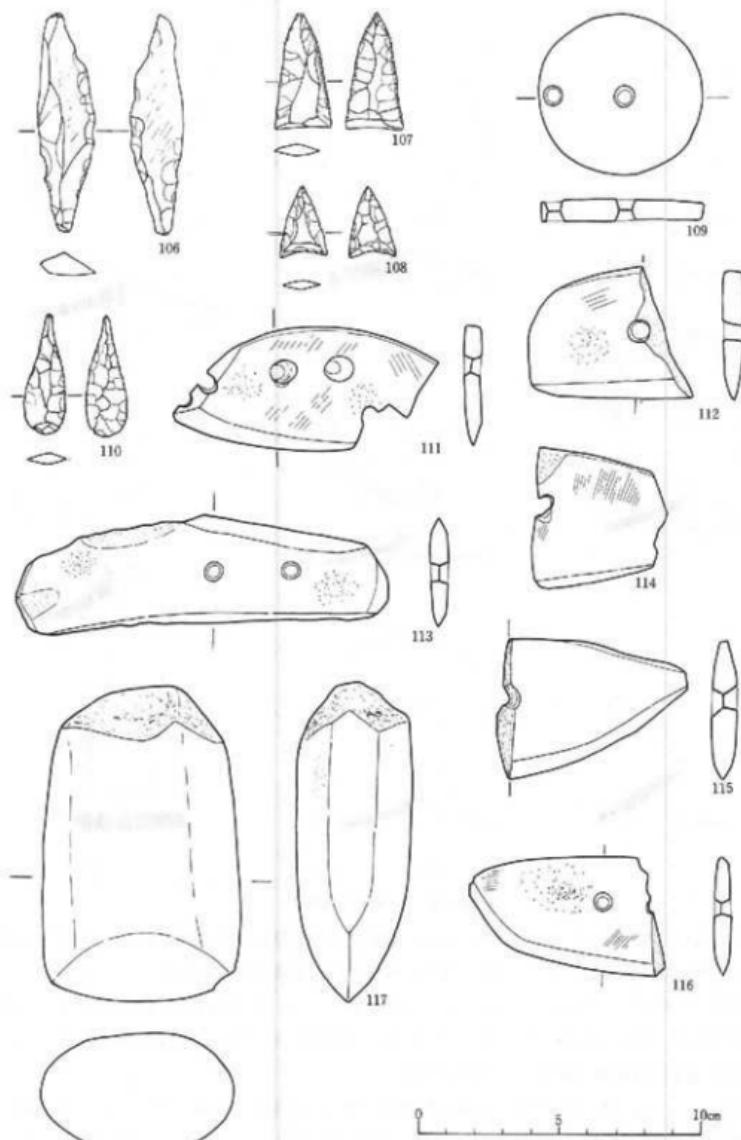


第19図 弥生時代の遺物8

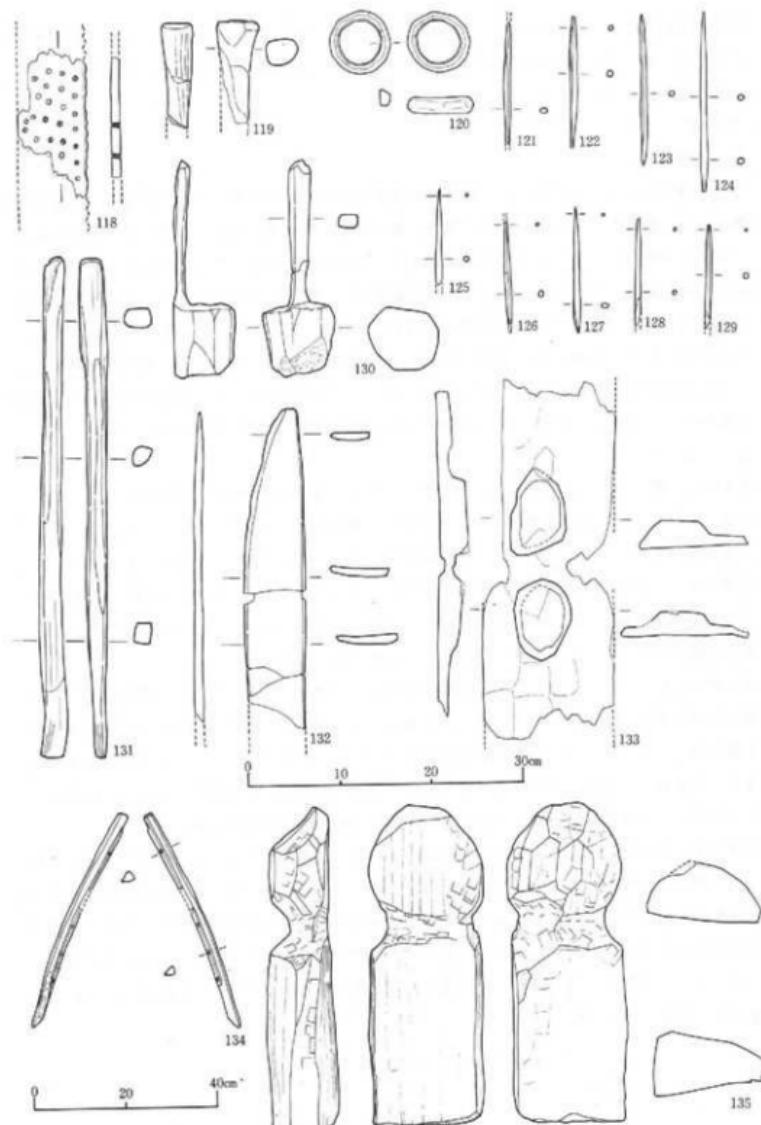
ものが多く、壺用のものも少數認められる。壺蓋には、笠形で中央に1個穿孔し、両端に2個及び1個1対の孔をもつものが多い。また、据部に周円を描くものもある。

**石器** 石器の出土量は、土器に比してあまり多くない。中でも石包丁は6点出土しており、注目される。112・114は綠泥片岩、111・113・116は粘板岩、115は安山岩製と考えられる。109は石包丁を紡錘車に転用している例である。

**木器** 木器には、鍔・容器・腕輪・刺突具・用途不明品などが出土している。133は鍔の未製品、135も容器の未製品と考えられる。120は、外径6.7cm、内径4.6cm、高さ1.5cmを測る橢円形の腕輪である。134は、手綱で先端部分で円孔が5カ所認められる。120～129は、刺突



第20図 弥生時代の遺物 9



第21図 弥生時代の遺物10

具で計10本検出した。図版十四Bは、基部に円孔を穿つ刺突具である。118は、用途不明の木製品で長方形の片側側片は波状につくり出し、内部に1.5cm間隔で径0.8cmの円孔を穿ち、円孔内には目釘を挿し入んでいる。

#### 4.まとめ

##### 1. 遺構について

今回の調査で検出した遺構は、古墳時代の遺構及び弥生時代前期の遺構である。古墳時代の遺構は、出土遺物から庄内期～布留式期で主体は布留式期と考えられる。遺構は、後世の削平などにより明確ではなかったが、竪穴状の遺構、井戸状の土壙及び溝などを検出しているので、集落の一部を調査したと考えられる。盛土状遺構は、当初方形周溝墓のマウンドの可能性があると考えたが、1. 盛土内に大量の遺物が含まれること、2. 主体部らしき施設がないことなどから否定的であり、今後に課題を残している。杭列を作う溝などは、水田の水路の可能性もあり、今回の調査地点が遺跡の周辺部であることから、今後周辺で水田が検出される可能性は高いと思われる。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期中頃～新段階と考えられる。

##### 2. 土器について

弥生時代前期の土器は、コンテナ20箱分出土したが、器種で分類すると壺165点、甕479点、鉢48点、となる。甕と壺の比率は、1：3となり、甕の比率が高いことがわかる。壺165点のうち、頭部に段をもつもの3点、削り出し突帯3点、削り出し突帯上に沈線文をもつもの12点、貼付突帯3点、11条の沈線文十竹管文1点の内訳になり、圧倒的に削り出し突帯上沈線文をもつものが多い。沈線文は、2～5条のものが多い傾向になる。胎土で見ると165点のうち121点が生駒西麓産の土器で、残り44点が他地域からの搬入品になる。

次に甕は、479点出土したなかで、口縁逆L字形などは少なく、ほぼタイプは限定されている。頭部の沈線文も3～5条がもっと多く、条数の多い（7条以上）ものや平行斜線文・刺突文は少量である。479点のうち生駒西麓産の在地の土器は、358点で、残り119点が他地域産の甕になる。比率は、在地：他地域=3：1になる。頭部に文様のない無文土器は、全体で127点出土したが、口縁端部に刻目をもたないものが89点と多いのが特徴である。

今回出土した前期の土器は、一括性が非常に高い資料と考えられる。特に盛土1・2から出土した土器は、特徴的である。壺では削り出し突帯十数条の資料が多く、これに段をもつもの、貼付突帯をもつものが加わる。頭部も33のように長頸の傾向がうかがわれるとともに、沈線文多条化の傾向も認められる。甕も無文のものが多く出土しており、多条の新しい要素も加わっている。これらの特徴から、盛土1・2内出土の土器の時期は、前期中～新段階で、中心は新段階のはじめ頃と考えられる。

## II. 弥刀遺跡第4次調査報告

### — 弥刀小学校給食場建設に伴う発掘調査 —

#### 1. 調査の経過

今回報告する弥刀遺跡第4次調査は、昭和56年に市立弥刀小学校内で計画された、学校内給食場建設に先立って実施したものである。(東大阪市友井1丁目所在)

弥刀遺跡は、東大阪市の西城を西北に流れていた旧大和川の支流の長瀬川(久宝寺川)が大きく弧状をえがき北へカーブする所の東岸自然堤防~微高地に立地している。周辺には、近江堂の集落が形成されているが、その南端には『延喜式』神名帳に記載される弥刀神社があり、水戸神といわれる速秋津彦命・速秋津姫命の二神を祭っている。

調査を実施した市立弥刀小学校は、神社の南東約150mにあり、古代には物部氏の一拠点として登場する衣摺の対岸地域にあたり、相当古くから大和川水系を通じ交通の要所として繁栄してきた地域の一つといえる。(第1図)

弥刀遺跡の発見は、昭和38年の旧布施市時代、弥刀小学校の北西校舎の建設の際に古墳時代の須恵器提瓶等と共に木棺材と推定された長大な板材が多数出土したことから始まる。遺跡は古墳時代にとどまらず、昭和47年に実施された同校西側校舎建設に伴う第1次調査では、曲物井戸6基のほか、溝状造構・柱穴群などの遺構と遺物が出土し、平安時代末期~鎌倉時代初めにかけた12~13世紀代の集落跡の一部が確認され、井戸の中には10世紀中頃にさかのぼるものもあった。

#### 2. 調査の概要



第1図 調査地位置図

今回の調査は、西側校舎の南に東西に長く計画された給食場建設予定部、面積にして約200m<sup>2</sup>を対象にしたもので、東西約20m、南北10~9mの範囲について、昭和56年9月7日~10月3日までの間に発掘調査を実施した。

調査は、機械掘削により上部擾乱層を除去する作業を行ったが、西側区域では比較的深い所まで擾乱され、幸いにも東側 $\frac{2}{3}$ の区域は破壊をまぬがれていた。(第3図)

調査地の層序は次のとおりで、

第1層~2層は擾乱土~旧盛土

第3層 旧耕土

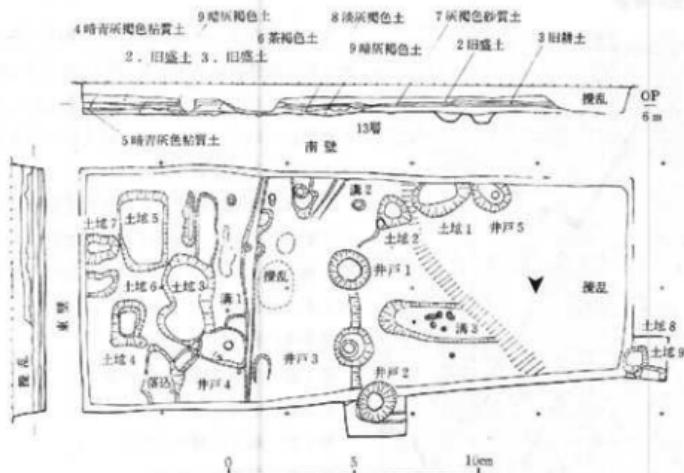
第4層 暗青灰褐色粘質土

第5層 暗青灰色粘質土

第6層 茶褐色土



となっている。遺構をまず検出したのは、調査区中央より東半にかけて、第9層上面で、南北に続く溝状遺構7本を検出した。これらの溝は共に近世以降の烟の鉛及び溝と考えられるものである。東端区域は西方より傾斜下向して一段低く、暗青灰色粘質土となって同時期の水田又は池が想定される。調査地西半は一きわ高い地形が北方～西方へと続いていたよう(第2遺構面)が第9層と同じ高さまで高まりを見せ、第10層と共に上部が削平されている状況を呈していた。(op6.0m)



この面で上部を削平された瓦積井戸 2 基（井戸 1・2）を検出した。前記溝は、井戸の一部を削っており、井戸の方が古い時期のものである。

下部の第11・13層上面では、古い時期の遺構面を検出した。上層の第10層には須恵器・土師器片を含むほか、ほとんどが瓦器椀片・陶器細片を含む包含層であるが西半区域には後世の削平によって存在していない。包含層の下面（遺構面 II）では、曲物使用の井戸 2 基、溝状遺構 1、井戸であったとみられる円形土塙 2 を検出した。またこれらより若干古い大形の土塙 5 基を検出している。また、地形の高まり部分で幅広の東西溝の一部が削平をまねがれて遺存していた。

調査地東北角付近には、古墳時代の南東一北西に継ぐ自然流路の堆積層（第11～12層）があり、上層で須恵器高杯・土師器高杯片が出土している。

### 3. 検出の遺構

検出した遺構について順にその概要を記すこととする。

#### 井戸 1（第4図上）

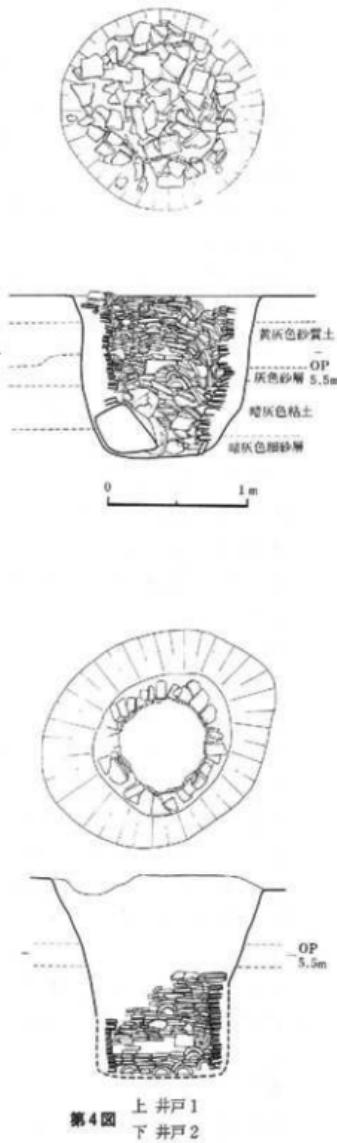
調査地の中央で検出した瓦積井戸である。

直径1.3m、深さ約1.15mの掘形内に、平瓦・丸瓦を主体に軒平・軒丸瓦・瓦質土器・火舎・摺鉢の各破片を混え、雜然と円筒形に積み上げている。瓦積みは径0.8m、高さ1.15mを測り、最下部には30～20cm大の花崗岩の自然石3個を据えている。

使用されている瓦類は大半が火を受けており、積み方は乱雑で東半壁は崩壊していた。内部より下駄片が出土したにとどまる。

#### 井戸 2（第4図下）

井戸 1 の北側で検出した瓦積井戸である。上半部は崩壊していた。直径1.65m、深さ1.4mの掘形内に井戸 1 同様の瓦類を積み（径65cm、深75cm）、その積み方はややていねいで、下部に自然石数個を置いていた。井戸底部より綠釉椀片が出土している。



### 井戸 3

井戸 1 と 2 の間に検出した径1.6m、深0.8mの掘形内底部に径0.7m、深0.7mの2段掘形を残すが、内部には井戸備等を全く残しておらず、全てぬき取られた瓦積みの井戸であったようである。

### 井戸 4 (第5図上)

井戸 3 の東側に検出した曲物井戸である。長辺1.9m、短辺1.4m、深さ45cmを測る長方形の掘形土壌底部の西寄りに径48cm、深さ55cmを測る穴内に4段の曲物を積み、上部に土師器土釜の口縁部を3段のせ、さらに上部に須恵器大甕の口頭部（口径36cm）をのせている。二段目の土釜類は破れて曲物内上半に落下し、底部には瓦質の大甕は1個体分が出土した。

井戸の上段掘形底部の北端で、土師器小皿と板状木製品3枚分を検出している。

曲物の寸法は、1段目径34cm、高19cm、2段目径31cm、高9cm、3段目径31cm、高11cm、4段目径26cm、高21cmである。

### 井戸 5 (第5図下)

西へ北から続いてきた地形の高まりの南端に位置する曲物井戸である。

長辺1.7m、短辺1.4m、深さ0.4mを測るだ円形の掘形底部に3段の曲物を埋めている。上部は中世の削平で削られている。掘形周辺より黒色土器（第7図-5）が出土している。曲物の寸法は、第1段径30cm、高8cm、2段目径27cm、高8cm、3段目径27cm、高さ10cmを測る。

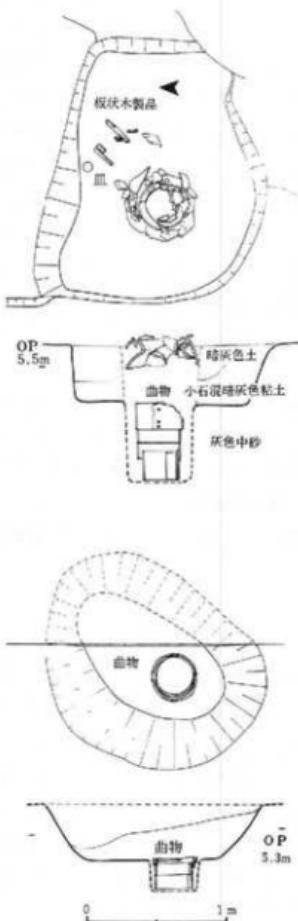
### 溝 1

井戸 4 の西に南北に続く小溝で、幅30~60cm、深さ8~10cmを測る。井戸 4 とはほぼ同時期の排水溝である。

### 溝 2

溝 1 の西側、調査地外南西方向へ続く小溝で、幅40cm、深さ10cmを測る浅い溝である。

### 溝 3



第5図 上 井戸 4  
下 井戸 5

東西に続く溝で、幅160cm、深さ10cmを測る。約4mにわたって検出した。西方は破壊され、上部も後世に削平されていて当時の深さ等は確認できない。

#### 土塙1～9

土塙1は、井戸5の東側に隣接するもので、長径2.3m、短径1.6m、深さ50cmを測る。井戸5の掘形と同じ形態であるが、井戸の形跡は全く認められなかった。土塙2は、一辺1.3m、深さ40cmを測るが、共に遺物はなかった。土塙3～7は、同一面に同様の埋土をもつ不整形～長方形に近い土塙で、南北に長い土塙3は長さ3.5m、幅2.1m、土塙4は長さ1.9m、幅1.2m、土塙5は長さ3.2m、幅2.0mあり、東西に長い土塙6は検出長1.3m、幅1.0m、土塙7は検出長1.4m、幅1.2mを測る。

これらの内、土塙4・5は比較的形の整ったものであるが、全てとくに目立った遺物はなく、内部の埋土は暗灰褐色粘質土と灰色細砂のブロック土で、掘られた後間もなく人為的に埋められた状況を呈する。この中で、不整形な土塙3は、埋土の上部に瓦器碗、白磁片など若干の遺物が含まれ、埋土中央に炭化したワラ状の植物遺体層が残り、南端と西端に各々径3cmの木杭が打ち込まれていたのが注意される。土塙は深さ0.8m～1.0mを測る。

#### 4. 出土遺物（第6～8図）

今回の調査によって、調査地東半の中世遺物包含層を残す付近から比較的多くの瓦器・黒色土器・土師器・陶器片が出土しているが、ここでは造模より出土した土器類を中心に説明する。

##### 井戸4出土土器（第6図1～3、第7図8・9・13）

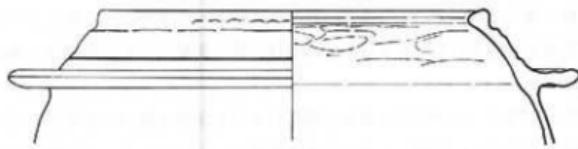
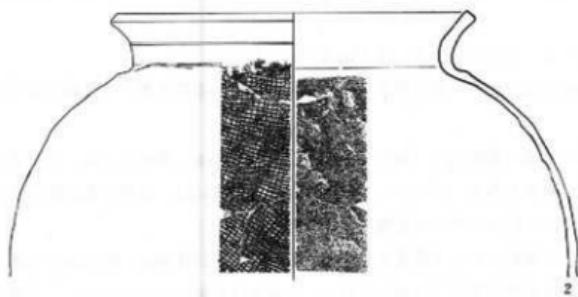
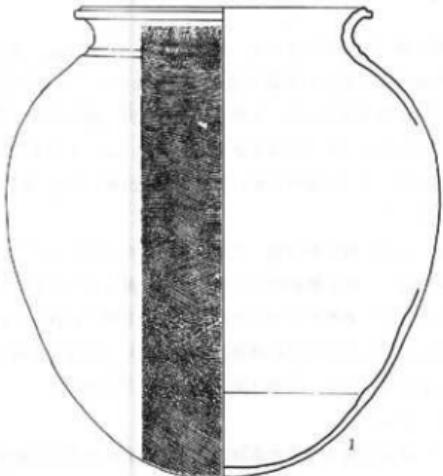
井戸4の曲物上部使用の土師質羽釜・須恵器大甕の他、瓦質大甕・土師器小皿・信楽焼壺片等がある。

1は、瓦質の大甕で曲物内より割れて出土した。口径30cm、胴径43.3cm、器高41.5cmを測り、短く外反する口縁部上面を二段につくる。頸部と胴部の境には、指押え部が周囲にのこり、底部まで、横位ないし斜位のタタキを施している。

2は、井戸口に使用された須恵器大甕の上半分である。口径36cm、胴径56cmを測る。須恵質であるが、瓦質土器的な黒青色の発色が混る。口縁部は直線的に外反させ、平端面をつくっている。頸部の粘土接合部は、指により抑えられているが、ヘラ状のもので押えている所もある。外面は、やや長方形の格子状タタキを施し、内面は、器壁調整のための無造作な指痕が多くのこり凹凸がはげしい。

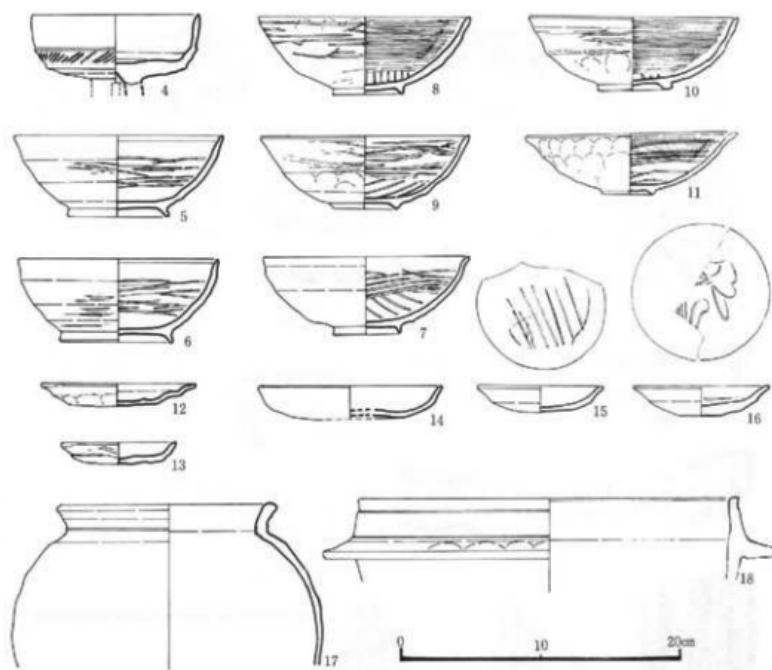
3は、土師質の羽釜で、口径27.5cmあり、胴部以下は欠き高さ約10cmを測る。口縁部は、外反せず、胴部からゆるやかに内傾し、丸く大きな端面をつくっている。また横に広い鶴をつけている。8・9は、瓦器碗で、8は口径15.2cm、高さ5.6cmを測り、内面はヨコ位のミガキ、底面に11条の平行線暗文を施す。9も同径で高さ5.3cm、内面はやや太いヨコ位の暗文を付し、底面には同じく11条の平行線暗文を付す。

##### 井戸5出土土器



0 10 20cm

第6図 井戸4 井戸銅土器他



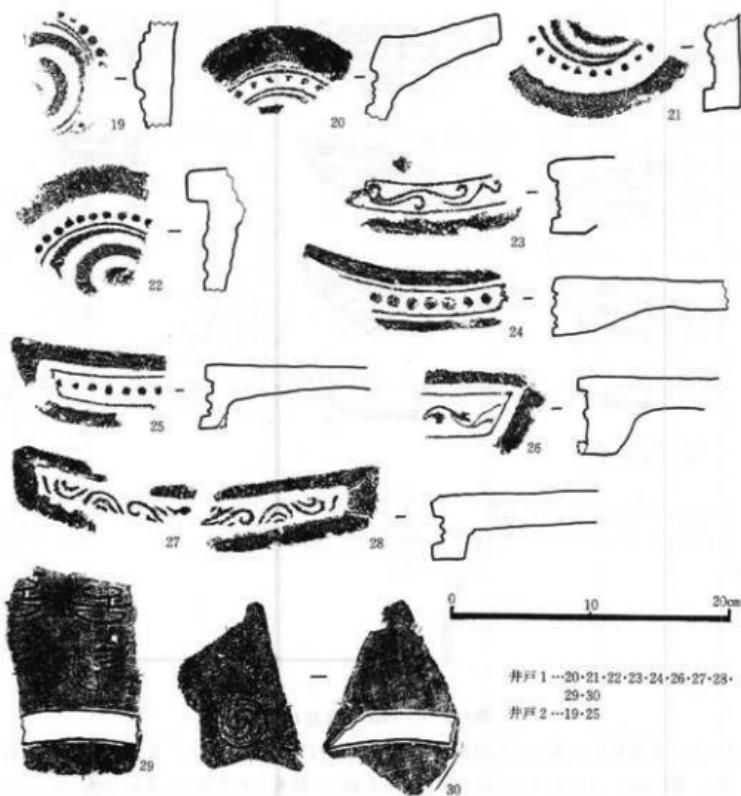
第7図 井戸内他出土土器・磁器

井戸 5 の掘形埋土上部及び周辺から出土したものに黒色土器椀 5・6 がある。5 は口径 14.9cm、高さ 5.9cm、6 は口径 14.2cm、高さ 6cm を測る。両椀とも内黒で、丸い器体に安定した高台を付けている。内面及び外面の一部には横位のヘラミガキが施されている。

最も西の土塙 8・9 でもこの時期の椀片が出土している。

遺物包含層出土土器

4 は、調査地東北部の古墳時代自然流路埋土内より出土した須恵器高杯で、口径 12cm、杯高 4.6cm を測る。7 は、井戸 4 の北東落ち込み内より出土した瓦器椀で、口径 15cm、高さ 5.6cm を測り、内面には横位に、底面には 7 条の平行線暗文を施している。10 は、井戸 4 の南側で出土した瓦器椀で、口径 15cm、高さ 5.4cm を測り、内面は横位に細いヘラミガキ、底面に 7 条の平行線暗文を施す。12 は、土師器小皿で、径 11cm、高さ 1.6cm を測り、体部から口縁にかけて二段に折り返される。14 は、土師器中皿で復原径約 13cm、高さ 2.4cm を測り、やや上り底でわずかに口縁を外へつまみ返す。11 は、後出の瓦器椀で、口径 15.2cm、高さ 5.5cm を測る薄手の口の開く椀である。外面は、指押え痕を残し、内面は、横位の粗線とハケ目を施し、底面に羅線



第8図 井戸使用の瓦類

の暗文を施している。15は、瓦質小皿で、底面に平行線暗文を施す。径9cmあり、口縁をゆるやかに外反させる。16は、青磁の小皿で、径9.8cmあり、内面に花文を施す。

17は、土師器の壺で、口径15.6cm、現存高12cmを測り、指押えによる凹凸のある粗雑な壺である。18は、瓦質の土釜で、口径27cm、全体として丸みの少ない石鍋形のものである。

#### 井戸使用瓦類（第8図）

井戸1と井戸2は、ほぼ同時期に前後してつくられたものである。井戸1の方には、比較的多くの軒瓦が含まれ、軒丸瓦として20・21・22があり、軒平瓦として23・24・26・27の4種がある。井戸2では少く、19の軒丸瓦、25の軒平瓦があるのみである。平瓦、丸瓦共に焼けたも

のが多い。

19は、右まわりの三巴文で、巴の尾は細くて長く、外区にやや大きい連珠文を配す。22も同様の三巴文で、連珠文の外には圓線を施していない。20は、左まわりの巴文で、小さくて間隔のある連珠文の外に細い圓線を一条めぐらす棟瓦である。21は外区が22と類似するが左まわりの巴文で、瓦当復原径は約14cmを測る。23は、唐草文軒平瓦で、曲線状の顎を呈するものか。瓦当面は厚さ5.3cmを測る。26も稚拙な唐草文で、瓦当面厚さ5.6cm、段顎に作っている。24・25は、共に圓線をめぐらす連珠文で、24は径0.8cmの大きな珠文を配した曲線顎のもの、25は小さな珠文を連ねた段顎のものである。27は、波状文に近い変形唐草文で、瓦当幅約26cmを測る。瓦類の中で、平瓦の多くに、大小の斜格子状のタタキ文を裏面に施すものが多く、大きなものでは4cm~3.5cm角、小さなものでは1.6~1.0cm角のものが多くあり、菱形に近いものも含まれる。また、記号状の文様や巴文をタタキ文として付しているものもわずかにある。

## 5.まとめ

弥刀遺跡については、まだ十分解明されたといえる段階にいたっていない。昭和38年に遺跡発見の端緒となった古墳時代の須恵器を伴った木棺状の木材の発見は、どういった遺構なのか、また昭和47年の調査で平安時代中ごろから鎌倉時代前半にかけての曲物井戸群とピット群が検出されたが、生活の中心となる住居跡の手がかりは十分見えられていない。このような状況は、市内の若江遺跡でも同様の状況を呈している。

今回の調査も井戸の検出を中心とした報告にとどまる所となるが、現在、さらに南側、近鉄弥刀駅東側で病院建設に先立ち調査が進められ、井戸や溝の他建物跡の存在を示す多数の柱穴群が検出されており、今後の成果に期待される所として、今回なりの調査の結果を簡単にまとめてみることしたい。

今回の調査では、瓦積み井戸2基(1・2号)、曲物井戸2基(4・5号)、その他井戸と考えられる個所1、性格不明の土塙9個所及び溝を検出した。瓦積み井戸は、使用されている瓦類の鎌倉時代前後を下る室町時代後半以降と考えられる。使用されている瓦類はどこから搬入されてきたのか問題であるが、周辺では中世寺院跡の明確なものは全く確認されていない。近江堂周辺に当該時期の寺跡が存在するのかあるいは水運を通じて遠隔地からの搬入が不明である。曲物井戸の内、残りの良かった井戸4は、土器の形式から12世紀後半~13世紀前半にかけた時期のもので、井戸5・土塙8・9は、10~11世紀ごろのものと判断される。

周辺から出土した瓦器碗の多くは、13世紀代のものが多く、前回北側調査地の井戸を中心とした時期とはほぼ同時期の井戸群の広がりを見せるが、井戸群を包括する当時の集落は、旧長瀬川の東岸自然堤防上の高い地形に沿って相当広範囲に広がっていることが確實で、市内旧吉田川の東岸自然堤防上に平安時代以降、周辺低湿地の開発の拠点として営まれた水走遺跡のあり方に類似する点、注目される遺跡の1つである。

1) 下村晴文「弥刀遺跡発掘調査概報」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度』1981.10

### III. 瓜生堂上層遺跡調査報告 —市立八戸ノ里東小学校校舎増築に伴う発掘調査—

## 1. 調査の経過

近鉄八戸ノ里駅の南東に所在する八戸ノ里東小学校は、昭和54年に開校した新設校である。新設にあたり敷地一帯が、弥生時代の代表的遺跡の1つ瓜生堂遺跡の広がりの内、古墳時代以降～歴史時代にかけた上層の遺跡が及んでいることが想定されるとして、昭和52年8月に予定地の試掘調査が行われ、予想どおり古墳時代～平安時代にかけての遺構と遺物の存在が確認されたため、さらに昭和53年1月から3月にかけて、敷地北辺に建設予定の東西校舎含予定部約1000m<sup>2</sup>についての発掘調査が実施された。<sup>11</sup>この内、調査地中央付近を中心に遺物包含層が良好に残り、平安時代の掘立柱建物跡5、井戸2、焼土塩1の他、奈良時代の整地をまぬがれて、古墳の存在を考えられる多量の円筒・形象埴輪片が出土した。

今回の調査は、前回の調査対象となった北側校舎の西端に1教室(3階)分約100m<sup>2</sup>を増築するもので、調査は、昭和56年8月20日～9月5日の間に実施した。

## 2. 調査の概要

調査時の学校敷地は、昭和53年の調査時より、高さ約1.5mもの盛土・整地が行われ、OP 4.6mを測る。調査部分は、南北・東西ともわずか約10mで、旧耕土面（OP 3.1m）までの間の盛土層を機械掘削し、以下人力による調査を進めた。

調査地の層序は、昭和53年の調査で判明していたように、畠地であった高い部分を中心に遺構が残り、低い水田部分については、相当削平擾乱を受けた状況であったことが知られるが、今回の調査地点も相當に中世以降の造作によって、古墳時代以降～中世前半の遺物包含層（前調査の第3層）の削平を受けて消失していた。

本調査地点の層序は、過年調査地に隣接するため基本的には同じで、

- |     |                         |
|-----|-------------------------|
| 第1層 | 旧耕土                     |
| 第2層 | 黃灰色土                    |
| 第3層 | 黃灰色粘質土                  |
| 第4層 | 暗灰褐色粘土                  |
| 第5層 | 暗茶褐色土～黑褐色土（前回調<br>查第3層） |
| 第6層 | 暗灰褐色土（前回調查第4層）          |



## 第1回 調査地位置図

第7層 灰褐色砂質土

第8層 灰褐色粘質砂層

第9層 黄灰色細砂層

となっている。

調査の結果、第6層の暗灰褐色土が、前回調査層序の第4層に相当し、この層上面において、北東から南西に続く幅2.5m、深さ5~10cmを測る浅い溝状遺構と、それに続くとみられる同様の落込みを西側に検出したにとどまる。

これと並行するように、東側にも極めて浅い幅20cmたらずの小溝を検出している。

いずれの遺構内からも、めだった遺物はなく、若干の須恵器・土師器・瓦器・陶器細片を検出したのみである。

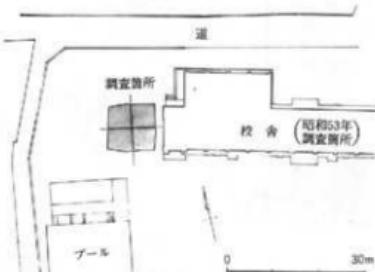
ただ、溝内及び周辺は凹凸がはげしく、人が踏み込んだ足跡状のものが多い所から、これらの遺構は中世末期以降の比較的新しい水田時の遺構・造作とみられる。

今回の調査では、前回の平安時代に相当する第3層（黒色土）=第5層はすべて削平されて遺存してなかったが、調査地北半にかすかに基底部を残す、幅約40cm、深さ約10~15cmのほぼ東西に続く溝を検出し、北西隅の深さ約25cmの落込みへ続くことを確認した。溝は、前記の新しい溝で切られているが、検出した長さ9mを測る。

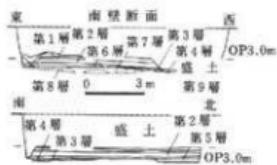
この他同時期の、80×50cmを測るだ円形のビット1も確認している。これらの遺構内からもとくに目立った遺物はないが、時期的には前回調査で確認されている掘立柱建物跡等一連の平安期集落遺構の一部が削り残されたものである。

下部の第6層は、奈良時代に行われた整地層で、調査地東半に分布していたが、層中には、わずかの須恵器・土師器・埴輪片が含まれる程度であった。

1) 芦本隆治『瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡』1979・3 東大阪市教育委員会

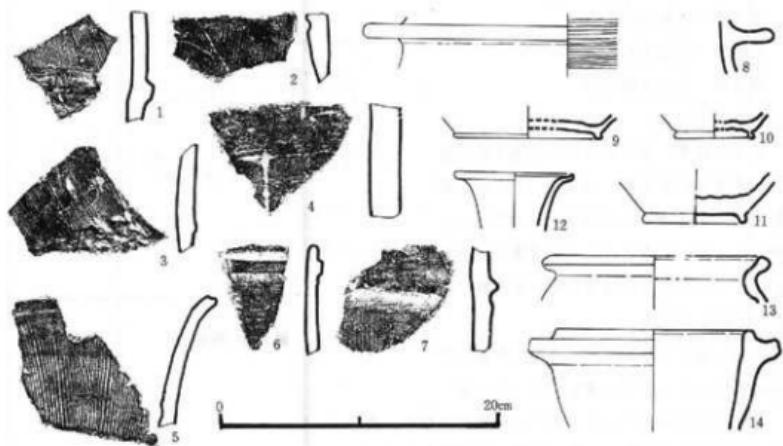


第2図 調査地点



- 第1層…旧耕土
- 第2層…黄灰色土
- 第3層…黄灰色粘質土
- 第4層…暗灰褐色粘土
- 第5層…暗茶褐色土～暗褐色土
- 第6層…暗灰褐色土
- 第7層…灰褐色粘質砂層
- 第8層…灰褐色粘質砂層
- 第9層…黄灰色細砂層

第3図 遺構及層序



第4図 遺物実測図

## IV. 繩手遺跡第8次発掘調査報告

### 1. 調査に至る経過

繩手遺跡は、現在の繩手小学校、中学校の敷地を中心として東西200m、南北400m、面積にして約8万m<sup>2</sup>の地域におよぶ遺跡である。遺跡が発見されたのは、昭和26年、繩手中学校の校舎建設に先だつ整地工事で土師器、須恵器を主とする遺物が出土したことからである。繩手遺跡での最初の調査は、昭和44年、繩手小学校校舎改築に伴うもので、住居跡、土壙墓、石組遺構、焼土面、溝状遺構、ピット群などの遺構とともに、多量の縄文土器、石斧、石錘、石鎌などの石器、土偶、環状垂飾などの土製品が出土した。小学校の敷地内では、昭和46年、体育館建設、昭和47年、体育館に接続させる浄化槽建設に伴う調査が実施された。この結果、縄文時代の石組炉跡、石組をもたない炉跡、埋甕、貯藏穴と思われるピット群、えの木塚古墳の一部が発見された。えの木塚古墳は、土を円形に盛り上げ、その表面にこぶし大の石を敷き並べた円墳と呼ばれるもので直径30mぐらいある。古墳のまわりには幅2m・深さ30cmの浅い堀(周濠)がめぐっており、古墳の斜面からは円筒埴輪がたくさん出土した。古墳の規模や出土した遺物から、5世紀前半に造られた古墳と考えられている。

南に隣接する繩手中学校でも校舎建設に伴う発掘調査が実施されている。まず、昭和45年5号館敷地<sup>(1)</sup>が実施され、上層で弥生時代中期の溝、後期の壇稟墓、下層で縄文時代後期の住居跡群、石組遺構が発見された。住居跡は残り方がよくなかったが、東西40mの間に弧状となって並んでいて、住居から石鎌、石斧、石錘などの石器や土器が出土した。昭和48年には5号館の東に隣接して校舎の増改築工事が計画され、調査の結果、縄文時代の住居跡の一部、弥生時代の土壙墓1基が発見された。昭和50年、屋内体育館の増改築に伴う試掘調査が実施され体育館の北西側で弥生時代の包含層が確認され細頸壺が出土した。また上層では古墳時代から歴史時代(鎌倉時代)にかけての包含層が確認された。これ以外の箇所でも南東側のかつて池であったところを除き、地表下約50cmで古墳時代から歴史時代(鎌倉時代)の包含層が、地表下3m前後で縄文時代後期の包含層が検出された。

昭和55年度の調査は、昭和50年度調査地の南約110mの地点で老朽化した木造校舎の建て替えに伴うものであり、地下に埋れている遺構、遺物の状態を調べるために実施したものである。調査は、東西50m、南北10mの範囲3×3mの試掘孔を4ヵ所あけ、それにもとづき調査範囲を設定し実施した。調査は、昭和55年4月7日から5月10日まで現場作業を行い、以降整理作業を実施した。

注 (1) 藤井直正、原田 修 「繩手遺跡」1 繩手遺跡調査会 1971年

(2) 原田 修、中村友博 「繩手遺跡」2 東大阪市遺跡保護調査会 1976年

(3) 下村晴文、庄司郁夫 「繩手遺跡」2 東大阪市道路保護調査会 1976年

(4) 福永信雄 「屋内体育館建設工事に伴う繩手遺跡の試掘調査」『調査会ニュース』No.3 1976年

## 2. 位置と環境

縄手遺跡は、東大阪市南四条町、末広町、六万寺町一帯に所在する縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。

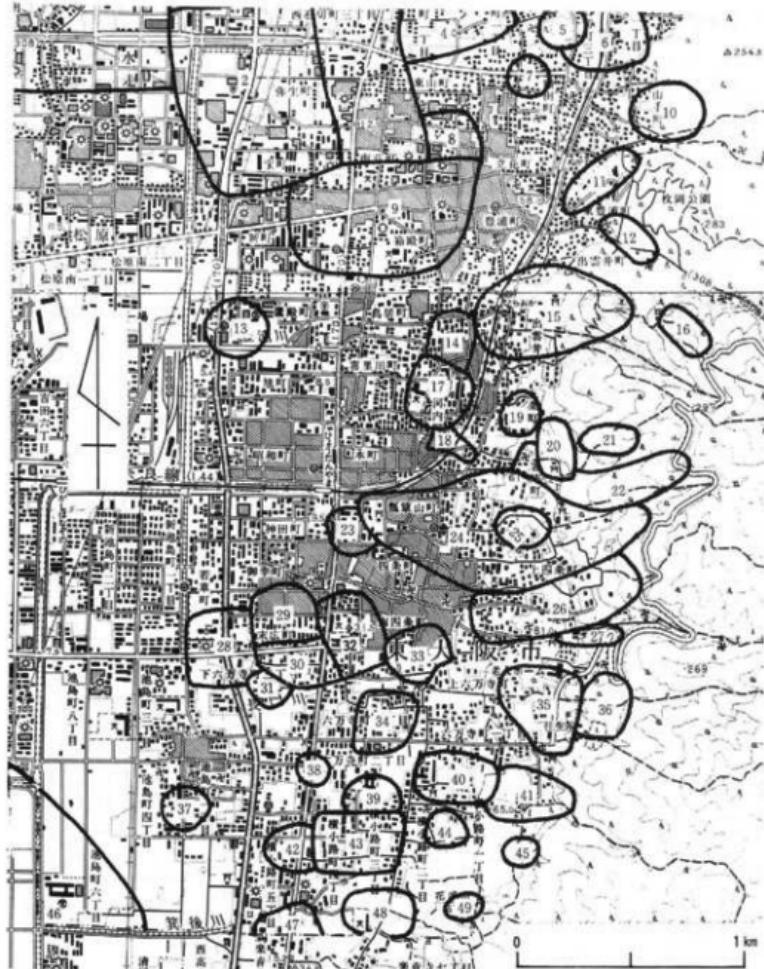
本遺跡の立地は、生駒山地の西麓に発達した扇状地の末端、標高10~20m前後にある。現在ではすっかり市街地となっているため、過去の地形が明瞭ではないが、遺跡のすぐ西側で比高2~5mの崖状となっている。この崖面は、今から6000~7000年前、縄文時代前期に世界的な気候の温暖化に伴い海平面が上昇、生駒山麓まで海水が入り込んだ時に汀線となっていたところと考えられる。

生駒山地西麓一帯は、古くから遺跡の密集地帯として知られている。旧石器時代では本遺跡の北東約1kmにある上四条町の山畠遺跡でナイフブレード、ポイントが出土している。また、東南東約1kmの六万寺町からもポイント（有舌尖頭器）が出土している。縄手遺跡は、縄文時代中期にさかのぼる遺跡で、中期や後期の土器、これに伴い石鎌、石匙、石斧、石錐、磨石などの石器が出土している。特に石錐の量が他の石器に比べて多くみられたこと、本遺跡の南約0.9kmにある馬場川遺跡N地点で中津式に伴って石錐が出土していることから、後期前半において周辺の海域での活発な漁撈活動がうかがえる。生駒山西麓では、本遺跡の北約2.8kmに神並遺跡があり、縄文時代早期に属する押型文土器及び有舌尖頭器、石鎌、石匙、石錐、磨石、敲石、砥石、スクレイパーなどの石器類のほか土偶が出土している。北約4.2kmに日下遺跡があり、縄文時代早期~晚期の土器、石鎌、尖頭器、石錐、楔形石器、敲石といった石器、セタシジミを中心とした淡水産、海水産、陸産の貝類、イノシシ、シカを中心にウサギ、スッポン、ヘビ、カエル、マダイ、サワラ、コイといった動物遺体などが出土している。南約0.9kmに馬場川遺跡があり、縄文時代中期~晚期の土器、石鎌、石斧、石刀、石棒、石皿、磨石といった石器、土偶・土版などの土製品などが出土している。北約1.8kmに鬼塚遺跡があり、縄文時代晩期の土器が出土している。

生駒山西麓に住んでいた縄文時代の人々は山や野にえものを求め、海、池、湖などで魚や貝をとり、木の実や草の根などをとる採集の生活をしていたことが出土遺物から推定できる。生駒の山並は、今よりもっと樹木が生い茂り、さまざまな動物たちが生息しており、縄文時代の人々にとって絶好の生活環境であったようだ。

縄手遺跡からは、弥生時代前期~後期の土器が出土している。これらに伴う遺構は明らかではないが、後期の墓域があったことが確認されている。本遺跡周辺における弥生時代の遺跡は北東約1kmに中期の土器、石器を出土する山畠遺跡、北北東約1.3kmに後期の皿池遺跡、東南東0.9kmに後期の岩滝山遺跡、本遺跡の東側に隣接して後期の上六万寺遺跡、西約0.6kmに後期の北島池遺跡、南西1.6kmには中期の池島遺跡がある。

古墳時代については、縄手小学校体育館建設に伴う調査により、5世紀前半のえの木塚古墳がみつかっているが、集落などの遺構は不明である。



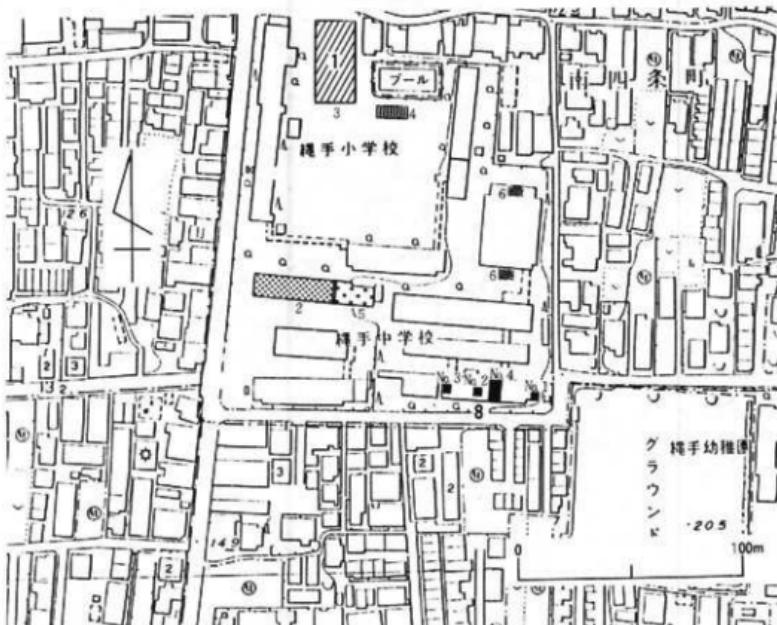
1. 水走遺跡      2. 鬼鹿川遺跡      3. 西ノ辻遺跡      4. 神並遺跡  
 5. 正興寺山遺跡      6. 神並古墳群  
 7. 若宮古墳群      8. 猿田寺遺跡      9. 鬼塚遺跡      10. 須田山古墳群  
 11. みかん山古墳群      12. 豊瀬谷古墳群  
 13. 耕立遺跡      14. 孤塚遺跡      15. 出雲井古墳群      16. 神津島祭祀遺跡  
 17. 犀池遺跡      18. 河内寺跡  
 19. 水走氏館跡      20. 客坊庵寺客坊城跡      21. 五条山古墳群      22. 客坊山古墳群  
 23. 市尻遺跡      24. 山畑古墳群  
 25. 山畑遺跡      26. 花草山古墳群      27. 五里山古墳群      28. 北鳥池遺跡  
 29. 五合田遺跡      30. 段上遺跡  
 31. 下六万寺遺跡      32. 繩手遺跡      33. 上六万寺遺跡      34. 船山遺跡  
 35. 岩流山遺跡      36. 往生院金堂跡  
 37. 池島東遺跡      38. コモ田遺跡      39. 北堀敷遺跡      40. 大賀佐古墳  
 41. 浄土寺谷古墳群      42. 西代遺跡  
 43. 馬場川遺跡      44. 具花遺跡      45. 浄土寺跡      46. 池島遺跡  
 47. 奥山古墳      48. 西の口遺跡

第1図 遺跡周辺図

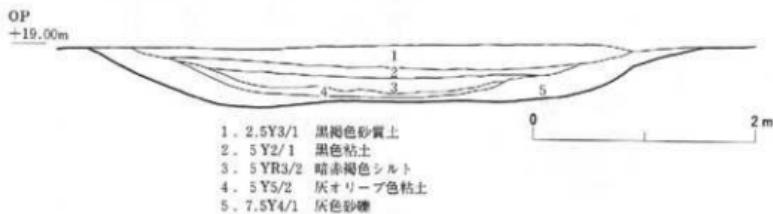
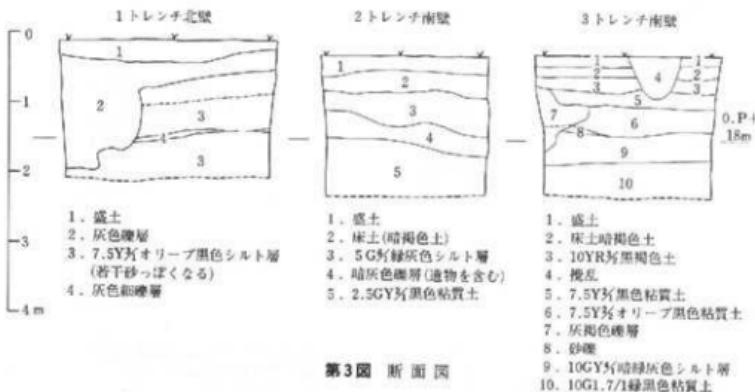
### 3. 調査の概要

今回の調査対象となった繩手中学校校舎改築予定部（管理棟）は、東西約50m、南北約10m、面積約500m<sup>2</sup>で、東西に細長い調査区となった。ここに3×3mの試掘孔を4ヶ所あけた。

調査の結果、No 1 トレンチでは、第2層灰色砂疊から弥生土器、縄文土器、ムクロジ、ドングリ等の種子類、第3層オリーブ黒色シルトの上層から弥生土器、下層から縄文土器、自然木が出土した。No 2 トレンチでは、第2層上面で西南から北東にかけて石列が見つかった。この石列は、水田の棚田に伴う土留用石垣であると思われるが上部は削平され残存していなかった。第2層からは弥生後期の長頸壺、6世紀中葉の須恵器杯身、壺、腹、土師器片、奈良時代の土師器片が出土した。No 3 トレンチでは、第2層から土師器片、須恵器片が、第3層から須恵器片、弥生中期の壺片が出土した。No 4 トレンチは、No 2 トレンチの東約8mにあたる。第2層黒褐色土には多量の遺物が包含しているが東側に延びないことから何らかの造構になる可能性が考えられた。そこでその広がりを調べるために拡張した結果、東西約4m、南北現長6.1mに延びる溝であることが判明した。改築される管理棟は平屋建てで基礎の掘削が浅いため、影響を及ぼすであろうと考えられるこの溝のみを調査対象とし実施することとした。

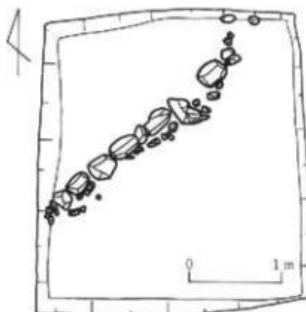


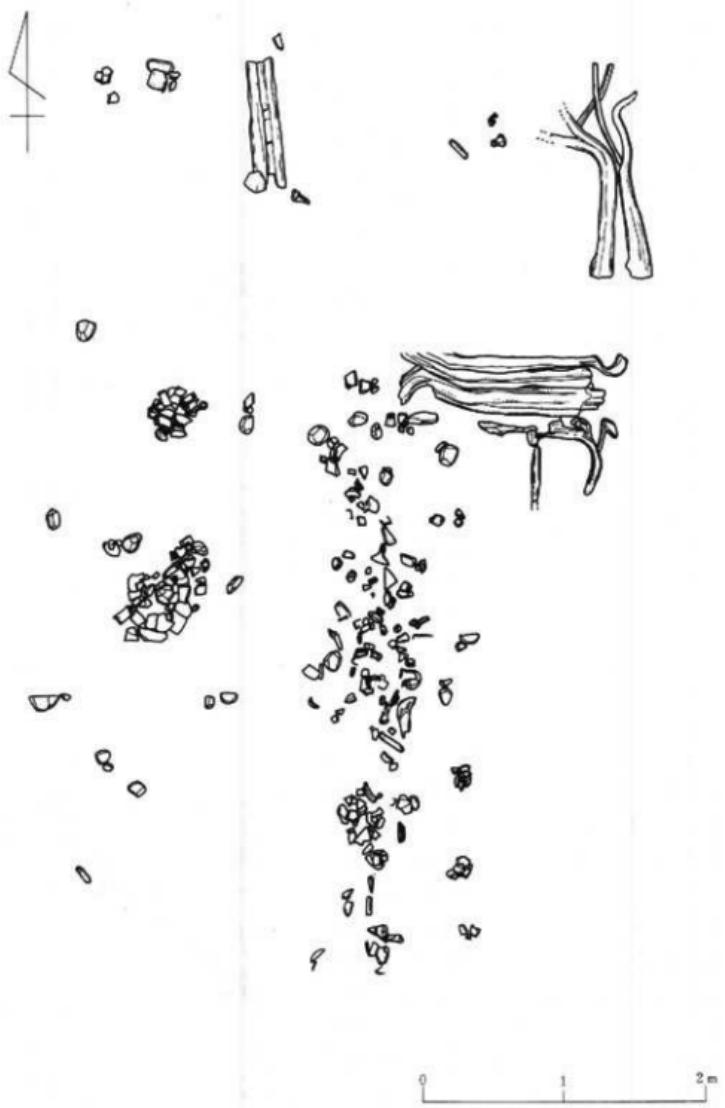
第2図 調査地点位置図 1:2500



### 溝

第2層上面で見つかった。遺構のベース面は暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）極粗砂—細礫層である。南北方向に延びている溝幅は北端で4.4m、南端で5.6mであり、深さは25~50cmで南にゆくにしたがい深くなる。堆積土は5層に分層できる。第1層は黒褐色（2.5Y3/1）砂質土で須恵器杯身、杯蓋、無蓋高杯、有蓋高杯、壺、土師器甕、羽釜、高杯、輪羽口、製塙土器、馬骨などが出土した。第2層は黒色（5Y2/1）粘土、第3層は暗赤褐色（5YR3/2）シルトで植物遺体を多く含む、第4層は灰色（5Y5/2）粘土、第5層は灰色（7.5Y4/1）砂礫、第6層は暗緑





第6図 遺物・獸骨・自然木出土状況 (1/40)

灰色（5G3／1）混疊土で、その下が暗オリーブ灰色細疊層である。溝の2～4層は粘土、植物遺体層で、一気に堆積した5～6層と違い、長い期間を経て形成されたもので、第1層では溝の東辺に沿う形で自然木（倒木）がみられ第3層の植物遺体層は溝の東側にあったこの樹木によるものと考えられる。遺物は大部分が第1層からの出土である。出土状況は溝の南半部分、それも溝の中央部分を中心に南北に延びる形で堆積しており、溝がほぼ埋まってしまっていたため、中央部分に捨てられたものと思われる。遺物密集地の北端やや西寄りで口を南に向けて出土した須恵器甕（第7図33）がほぼ完形に近い形に復元できた他は、ほとんどが破片であり、しかも須恵器、土師器、フイゴ羽口、鉄滓、馬骨（頭蓋、下顎骨を含む）馬骨（脛骨か）が雑多に混じりあった状況であった。

#### 4. 出土遺物

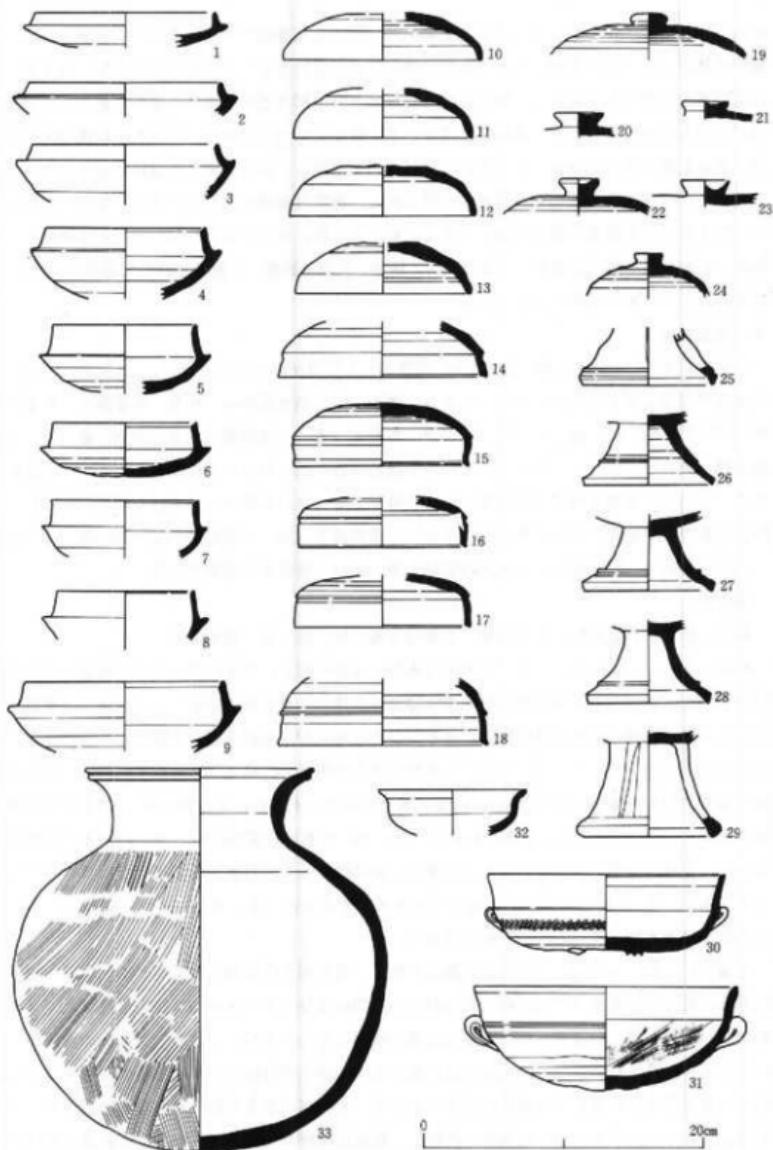
今回の調査では、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器が出土した。しかし、比較的まとまった状態で多量に出土したのは溝からである。溝からは、須恵器杯身、杯蓋、有蓋高杯、無蓋高杯、把手付き椀、椀、甕、直口壺、広口壺、短頸壺、甕、土師器甕、羽釜、高杯、瓶、杯、製塙土器、繩羽口、馬骨などが出土している。遺物は長期間にわたって投棄されたもので時間幅をもっている。遺物包含層は割合厚いため上層と下層に分けて取り上げを行なった。しかし土層、土質の上で明瞭に区分できたのではない。須恵器1～33、土師器55、57、58、61～65、67～70が上層出土、須恵器34～54、土師器56、59、60が下層出土の遺物である。

##### 須恵器

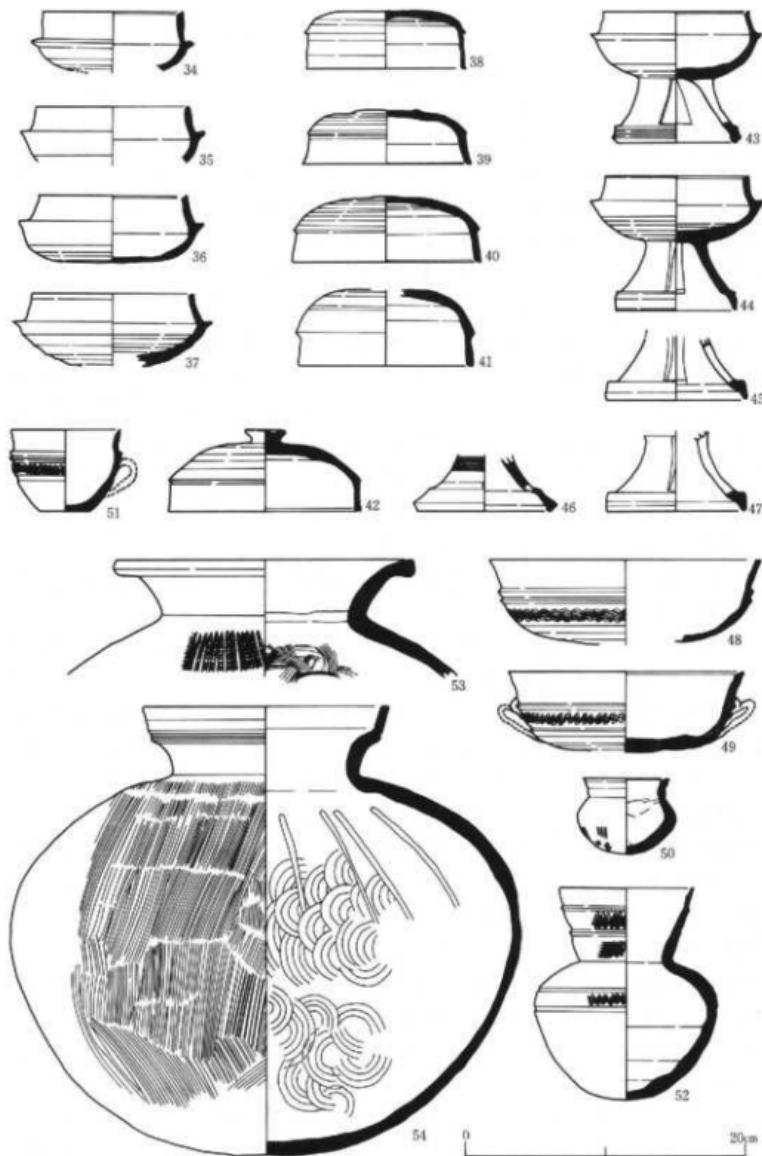
杯身、杯蓋、有蓋高杯、無蓋高杯、把手付き椀、椀、甕、壺、甕、甕がある。

杯身（1～9、34～37） 1～2のたちあがりは矮小化し、全体に浅く扁平である。受部はほぼ水平方向にのびるが端部はたちあがり端部と同様丸くおさめている。ヘラケズリは粗雑で、ヘラケズリの範囲は底部全体の約1/2である。3のたち上がり端部及び受部端部はやや尖りぎみにおさめている。4～9、34～37のたちあがりはやや内傾し、高さは2cm前後を測る。たちあがり端面はやや内傾するもの（37）、内傾の著しいもの（4、6、7、34、36）、内面に段を構成するもの（8、9）、丸くおさめるもの（5、35）がある。受部は外上方にのびるが比較的短かく、先端は丸味をもっているものが多い。底部は中心から外周へ全面にわたってヘラケズリするもの（5、34、36、37）、3/4以上ヘラケズリするもの（4、6～9、35）がある。8、9の胎土は他と較べ長石などの石粒が目立つ。

杯蓋（10～24、38～42） 10～13は器高が低く、天井部と口縁部との境界が不明瞭である。天井部の多くはヘラケズリするが雑なものが多い。内面はヨコナデをする。口縁端部は丸くおさめる。14は天井部と口縁部とをわける突出部の稜がほとんど失われている。天井部の約1/2以上にヘラケズリが施されている。口縁端面は内傾して、端面と内外面とをわける稜線は明瞭である。15～17は天井部と口縁部との境に凹線をめぐらす。天井部はあまり膨らみがなく、ヘラケズリも粗いもの（15）がある。口縁端部は内傾し、稜線は明瞭である。18、38～41は天井部と口縁部の境界に稜をもつが短かくて鋭さに欠ける。天井部は38、39のように扁平なものと高くて丸



第7図 出土遺物実測図



第8図 出土遺物実測図

味をもつもの（18、40、41）がある。19～24、42は蓋のつまみである。20～23、42は天井部に中凹みのつまみをもつ。20、23は直径3.5cm、21は3.3cm、24は3cm、22は2.9cmである。19は直径2.7cmで扁平なつまみである。24はやや中凹み状であるが2.1cmと小さなつまみである。

高杯 30、31、48、49は無蓋高杯、43、44は有蓋高杯、25～29、45～47は脚部である。無蓋高杯杯部口縁は外上方に直線的にのびる。端部は内傾する面をもつ。杯体部には上下を明瞭な稜線で区分しその間に櫛描きの波状文を横にめぐらした文様帯をもつもの（30、49）、櫛描きの波状文を横にめぐらした文様帯の上にのみ稜線をもつもの（48）、文様帯がなく稜線のみがめぐるもの（31）がある。文様帯には2個対象に飾りつまみがつく。杯部の底はヘラケズリするあまり目立たない。48はカキ目状である。30、31、49の脚部は長方形の透しで4方に透しがみられる。30の杯部と脚部の接合部分には斜放射状あるいは格子状の刻線がみられる。43、44の杯部たちがりは内傾し、端面は内へ傾斜している。受部は水平かやや外上方に直線的にのびる。底部は43が $\frac{1}{2}$ 、44が $\frac{3}{4}$ 以上をヘラケズリする。脚部は短く、43は四方に長方形透しが、44は三方に三角形の透しがある。44の脚部外面はカキ目状を呈する。43の脚端部は上下に突出させ2条の凹線をめぐらす。25、29、45、47は短脚で長方形の四方透しをもつ。45、47は脚端部を著しく誇張している。26～28、46は短かい脚部で据部に断面三角形の凸帯をめぐらす。46は円孔が3方にみられるが、26～28は全くみられない。

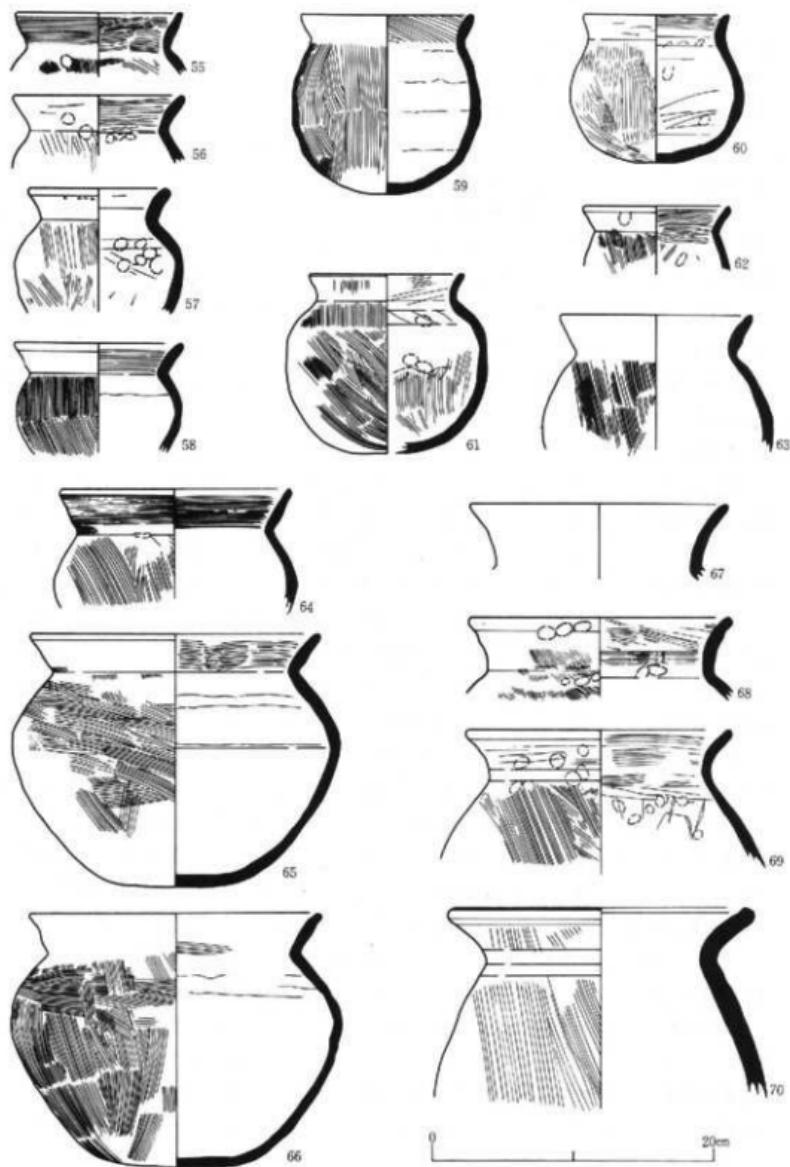
杯（32） 内弯しながら立ち上がる体部に外反する口縁部をもつ。端部は丸くおさめる。内外面ともいねいにヨコナデする。胎土には0.4～1mm大の長石を多く含む。

壺（33、53） 33は球形の体部にゆるやかに外反する口頭部をもつ。口縁端直下に断面三角形の凸帯をめぐらし、あたかも四線がめぐるように仕上げている。端部は丸くおさめる。体部外面は平行タタキメを残すが、内面は同心円文をていねいにナデ消している。頭部内面は口頭部と体部とを接合した粘土の継ぎ目が顯著であり雑な仕上げになっている。53の口頭部は相対に短く、外反度が大である。口縁部は下方に拡張され誇張されている。体部外面は格子タタキメを残す。内面は同心円文がみられるが、凹凸はあまりなく目立たない。

小型短頭壺（50） 短い口縁がやや外傾しながら立ちあがる。口縁端部はやや肥厚し面をもつ。全体に器壁は厚く、小型ながらずしりと重い。体部外面下半から底部にかけて平行タタキメがみられる。体部内面及び口頭部はヨコナデする。

把手付き椀（51） コップ状にやや内弯しながら立ち上がる体部にゆるやかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は細く尖りぎみにおさめる。体部外面は無蓋高杯と同様に上下を明瞭な稜線で区分しその区分された中に櫛描きの波状文を横にめぐらした文様帯をもつ。文様帯をはさむように1個の把手がつく。体部外面下半はヘラケズリされたのか稜線がみられるが、ナデられているため痕跡はみえない。

直口壺（52） 体部は肩がよく張り、尖り気味の底部をもち全体にイチジク形を呈する。口頭部は外上方に直線的にのびる。口頭部外面には断面三角形の凸帯を2条めぐらし、凸帯間と凸帯と頭部間に波状文をめぐらしている。体部の肩部には凹線を2条めぐらし、凹線間に波状



第9図 出土遺物実測図

文をめぐらしている。

壺 (54) イチジク形の体部に口頸部がつく。口頸部は一度外反したのち外上方に直線的に立ち上がる。外面の屈折部には断面三角形の凸帯をめぐらすため、凸帯の上面は四線状を呈する。口縁部分は外方にやや肥厚し上端は平らな面をもつ。体部外面は平行のタタキメを残すが内面は同心円文をナデ消しているためあまり目立たない。

土師器 壺、羽釜、高杯、瓶、杯がある。

壺 (55~70) 短く外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。57、58、64~66の体部上方肩部に張りをもつ。55~62は体部内外面と口縁部内面をハケで調整し口縁部外面はヨコナデである。55の口縁端部外面に一条の凹線がめぐる。56~60、62、63の胎土には金雲母、角閃石、長石、石英の微粒を多く含む。64の調整は前述の壺と同様であるが粗いハケメである。70は大型の壺である。口縁端部内面が肥厚し、端面に凹線が一条めぐる。体部、口縁部の外面に粗いハケメを施す。

## 5.まとめ

今回の調査では、近世から近代にかけての水田の棚田に伴う土留用の石垣、古墳時代の溝を検出した。溝は南北方向に延びていて幅4.4~5.6m、深さ25~50cmで南にゆくにしたがい深くなる。堆積土は5層に分層でき、第1層から多量の遺物が出土した。遺物は須恵器杯身、杯蓋、無蓋高杯、有蓋高杯、把手付き椀、椀、直口壺、壺、短頸壺、壺、土師器壺、羽釜、高杯、瓶、杯、製塙土器、繩羽口、馬骨などが出土した。遺物は6世紀前半のものが一番多いが、5世紀後半から7世紀中葉までのものがみられ、長期間にわたって投棄されたものと考えられる。ただ第2層から下は黒色粘土、暗赤褐色シルト（植物遺体を多く含む）、灰色粘土、灰色砂砾、暗緑灰色混疊土で土石流などの後、水が淀み粘土などが堆積したものと思われる。この時期は近くに集落などは存在せず、遺物も混入していない。遺物の投棄が始まるのは5世紀後半頃からで、人々が溝の周辺に住みつき生活及び生産活動に従事していたものと思われる。出土遺物は、日常生活で使っていた飲食具である高杯、杯身、杯蓋、把手付き椀、椀、貯蔵容器である壺、壺、調理、煮たき用である壺、瓶などがみられる。また、これらの遺物に混じり、繩羽口、鉄滓が出土している。繩羽口は、先端の内径2.1~2.7cmで、鉄滓が付着し熱により変色している。この繩羽口は、鉄などを溶かす時に温度を上げるために空気を送り込む最前端につけられるもので、この周辺で鍛冶が行なわれていたことを物語るものである。実際に鉄を溶かした時に鉄の素材に含まれている不純物を取り除くのであるがこれが冷えて固まった鉄滓が出土している。鉄滓の大きなものは8cm×10cm、厚さ5cm、小さなものは1.5cm×2.5cmで大小約20点が出土した。大きなものでは木炭や石などが入っている。溝の中からは馬骨も多く出土していること、繩手遺跡の北東約0.7km付近に広がる山畠古墳群では馬具（轡、辻金具、杏葉、雲珠など）が多数副葬され、それ以外にも刀、刀子、鉄鎌、鉄斧、鉄鎌、鉄槍などの鉄製品が副葬されていること、年代が大体一致すること、周辺では今のところ繩羽口・鉄滓の出土例がないことなどから、これらの鉄製品は繩手遺跡で製作された可能性が高いと思われる。

## V. 若江遺跡第19次発掘調査報告

### 1. はじめに

若江遺跡は、東大阪市若江北町3丁目付近を中心として、東西約650m、南北約950mにおよぶ範囲と推定される弥生時代から歴史時代（江戸時代）に至る複合遺跡である。昭和9年楠根川（現在の第二寝屋川）流路改修工事、昭和38年府道大阪中央環状線敷設工事、昭和42年若江公民分館建設工事などに伴い、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器などの土器や瓦が出土したことにより遺跡として知られるようになった。昭和47年若江小学校校舎増築工事に伴う調査を最初として、以降は毎年発掘調査が実施されている。1次調査では、平安時代から室町時代に至る井戸、溝、土坑、柱穴が、5次調査では、室町時代に築かれた若江城の建物跡が、14次、17次、18次調査で平安時代から江戸時代に至る井戸、溝、土坑、建物、水路と若江城の堀が発見された。

このような状況の中で、若江南町2丁目の若江小学校で校舎増築工事が計画された。周辺の調査結果から平安時代から室町時代にかけての中世集落跡が今回の建設予定地点に及んでいることが予想された。このため東大阪市教育委員会文化財課では事前の発掘調査が必要であると判断し、施設課と協議した結果、基礎工事で掘削する部分約90m<sup>2</sup>について発掘調査を実施する



第1図 調査地点位置図

こととなった。

発掘調査は、昭和55年10月7日より同10月23日まで延13日間にわたって実施した。

## 2. 調査の概要

今回の調査地点は、小字「城」の西限にあたるところであり若江城の関連遺構、中世集落跡が検出されると予想された。学校が建設される以前は水田、畠地として利用されていたところである。調査は地表下1.6mの旧耕土まで機械掘削し、以下は各層ごとに人力掘削により遺物・遺構の検出作業を行う方法をとった。その結果、地表下1.9m、第5層で14世紀頃の溝、井戸が検出され、瓦、土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器、石製品、木製品などが出土した。

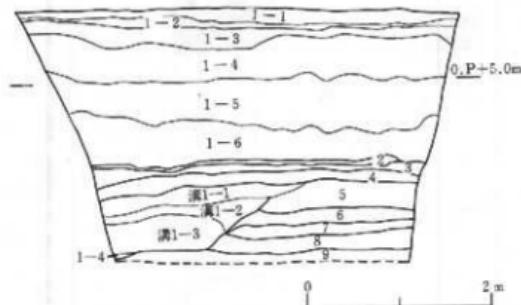
### 層位

現在の地表面より2.8m下までの土層は次のとおりである。地表面の高さはO.P5.8m測る。

- 第1層 盛土 詳細にみれば一番上が花壇の土でオリーブ褐色(2.5Y<sup>4/6</sup>)砂質土、次が旧耕土でオリーブ褐色(2.5Y<sup>4/4</sup>)砂質土。畠土であったものと思われる。この旧耕土も地上げされた後のもので、地上げの土は大きく4層に分けられる。1層目は暗オリーブ褐色(2.5Y<sup>3/3</sup>)細砂、2層目はオリーブ褐色(2.5Y<sup>4/3</sup>)細砂、3層目は暗灰黄色(2.5Y<sup>5/2</sup>)細砂、4層目は灰色(10Y<sup>4/1</sup>)細砂で、いずれの層にも暗緑灰色(10G Y<sup>4/1</sup>)粘土がブロック状に入っている。
- 第2層 暗緑灰色(10G Y<sup>4/1</sup>)粘土。水田の耕土であったものと考えられる。瓦、伊万里焼碗、瓦器碗、同擂鉢、須恵器片、土師器皿、馬齒など出土した。
- 第3層 緑灰色(7.5G Y<sup>5/1</sup>)粘質土。南側にやや傾斜している。
- 第4層 青灰色(5B G<sup>5/1</sup>)粘質土。南側ほど厚さを増す。
- 第5層 褐色(7.5Y R<sup>4/6</sup>)細砂混り粘質土。上面で井戸、溝等の遺構が認められた。
- 第6層 灰色(5Y<sup>5/1</sup>)粘質土。層厚約15cm。
- 第7層 にぶい黄色(2.5Y<sup>6/3</sup>)細砂。層厚約14cm。
- 第8層 灰色(10Y<sup>5/1</sup>)  
粘土。層厚約  
15cm。西側にや  
や傾斜する。
- 第9層 浅黄色(5Y  
7/4)細砂。層  
厚12cm以上。ほ  
ぼ水平に堆積す  
る。

### 遺構

第5層上面で井戸1基、  
溝2条を検出した。



第2図 北壁断面図

## 井戸

溝が完全に埋ったあとに築かれたものである。検出面での規模は、長径68cm、短径61cm、深さ27cmの梢円形である。井戸内から瓦が出土していること、井戸の径に沿った形で瓦がめぐつていて瓦が重ねられていることから瓦積みの井戸であったものと考えられる。井戸内の堆積土は暗緑灰色（5 G 4/1）砂混り粘土である。時期は明確にしえないが、溝が完全に埋った14世紀以降に築造されたものである。

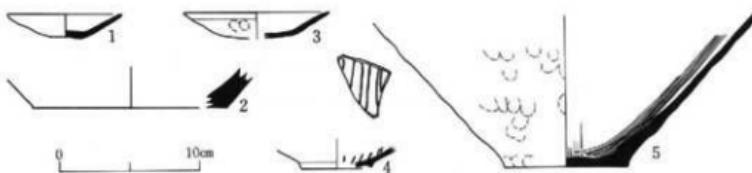
## 溝 1

南北方向に延びる溝である。東側肩のみの検出であるため規模を明らかにできないが、検出幅1.8~2.3m、長さ7.4m以上で調査地外へ延びている。深さは南端で14cm、北端で57cm、最深部が72cmあり、底は南から北に傾斜しているが、途中で急に深くなる。溝の堆積土は4層に分けられ、上から灰色（10 Y 5/1）粘質土、オリーブ灰色（5 G Y 5/1）粘土、灰色（10 Y 5/1）細砂混り粘土、暗緑灰色（10 G Y 4/1）粘土である。第1層から瓦、土師器皿、瓦器碗、瓦器羽釜脚部、青磁碗、須恵器、第2層から砥石、瓦、土師器皿が、第3層から曲物底板が出土した。瓦器碗、土師器皿により14世紀前半頃に埋ったと考えられる。

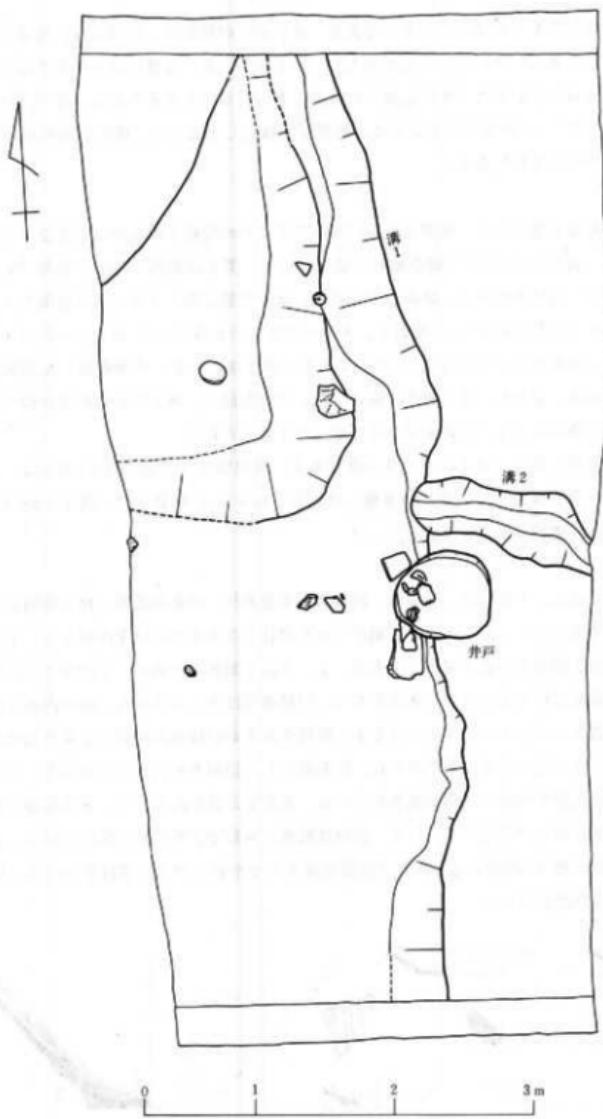
溝 2 東西方向に延び、溝1に合流する溝である。検出幅25~50cm、長さ1.3m以上、深さ5~12cmで底は西に傾斜する。溝内の堆積土は灰色（10 Y 5/1）粘質土で、溝1と同時に存在したものである。遺物は出土しなかった。

## 3. 出土遺物

今回の調査では瓦、土師器皿、瓦器碗、同擂鉢、須恵器片、国産陶磁器、輸入陶磁器、石製品、木製品、馬齒が出土した。大部分が細片であり図化できるものだけを掲載した。1、2は溝、3~5は第1層盛土の最下層出土である。1、3は土師器皿である。1はやや上げ底ぎみの底部から直線的に外上方にのびる部体をもつ。口縁端部は丸くおさめる。体部内面は底部周縁に沿って右廻りの1回ナデである。3も1と同様であるが口縁端部内側に1条の沈線がめぐる。口縁部内外面に煤の付着が多くみられ、灯明皿として使用されたものであろう。2は陶器の壺または甕の底部で内面に灰釉が施されている。東海産と思われる。4、5は瓦器である。4は碗で内底面に並行の暗文がみられる。高台は断面三角形で丁寧に貼り付けている。5は擂鉢である。擂目の原体は幅2.5cm、9本で底部周縁からやや右上がりに擂目をつける。体部外表面は指頭による凹凸が目立つ。



第3図 出土遺物実測図



第4図 遺構実測図

## VI. 弥刀遺跡第3次発掘調査報告

### 1. 調査に至る経過

弥刀遺跡は河内平野の西部を北流する長瀬川の右岸、東大阪市近江堂～友井に所在する。昭和47年に弥刀小学校の校舎増築工事に伴って発掘調査が実施された結果、平安～鎌倉時代の曲物鉢井戸4基とピット・土壙などが検出され、中世の集落跡であることが確認された（第1次調査）。これらの遺構はいずれも江戸時代の客土層によって覆われているが、これは宝永元年より行なわれた大和川付替工事に伴って旧堤防の切削しなどの整地が行なわれたためである。

昭和53年、第1次調査地と道路を挟んで隣接する東大阪市近江堂225番地において弥刀公民分館の建設計画がもち上り、遺跡の存在の有無を確認するための試掘調査が東大阪市遺跡保護調査会により実施された（第2次調査）。その結果、中世の土器多数を含む地層の存在が確認され、工事の事前に建物予定地200m<sup>2</sup>の発掘調査が実施されることとなった。調査は昭和53年10月、約2週間の期間を費して行なわれ、弥刀遺跡周辺の土地利用の変遷を知るうえで多くの知見を得ることができた。

### 2. 調査の結果

調査は機械により盛土を排除したのち、地層ごとに人力掘削し、精査を行なった。第3次調査地において認められた地層は次のとおりである。

第1層：暗灰黄色中～細粒砂混りシルト層。畑として使われていた当時の旧耕土層で厚さ20cm。

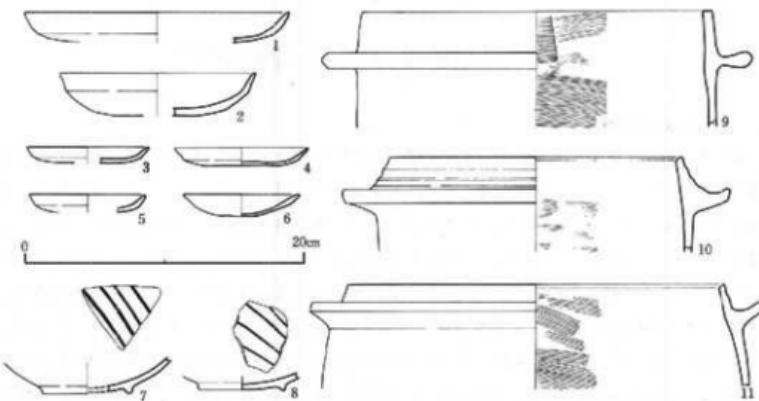
第2層：明褐色粗～細粒砂混りシルト層。中世の遺物を多数含むが、江戸～明治時代の遺物も少数混入する客土層。この層の最下部より鐵製の犁が出土。その型式より客土の時期は明治時代以後と思われる。厚さ約70cm。

第3層：灰褐色～青灰色中～細粒砂混りシルト層。自然堆積層で少數の磨滅した土師器片を含む。古墳～奈良時代の2次堆積層とみられる。層相は第1次調査地で遺構が掘られた地層と同様。湧水が多い点も同様である。周辺の字名に残る「友井」の地名はこの湧水層によって多数の井戸が養われていたことを示している。厚さ50cm以上。壁面崩落のため以下未調査。

これらの地層のうち、第2層は第1次調査の結果よりその下面に中世の遺構面が存在するとみられた



第1図 弥刀遺跡位置図



第2図 第2層（客土層）出土土器実測図

が、精査によっても何ら遺構を検出することはできなかった。このことから、第3次調査地においては後世の整地・削平によって本来は存在した中世の遺構面が失なわれたか、もともとこの地は集落内の閑地（畠地）であったために遺構として痕跡が残されることがなかったかのいずれかと考えられる。第3次調査地付近の耕地は畠が卓越する地域であるが、大和川付替後の江戸時代には当時盛行した綿作のために周辺より土を運び集めて一段高い畠を造成することがしばしば行なわれていたことから、すくなくとも第2層の形成についてはこうした畠造成に伴う削平・整地とその後の綿作の衰退に伴う畠地の再整理などによると思われる。

第2層からは、客土時期の陶磁器よりはるかに多量の中世遺物が出土した。瓦器の瓶・小皿・羽釜・火舎・搗鉢・土師器の皿・羽釜などの土器や平瓦・丸瓦などであるが、これらは鎌倉時代のものを主体として、ある程度の時代的なまとまりを有することから、おそらく周辺に存在する中世集落跡の遺物包含層そのものを削って客土に使った結果とみられる。第1次調査地で検出された遺構がいずれも江戸時代の客土層直下において一部削平を受けた状態で遺存すること、これらの遺構分布と今回の調査地とは隣接することなどを合わせ考えると、第1次調査地を削平した土が第3次調査地に運ばれた可能性も考えられるのである。

今回の調査によって、弥刀遺跡では大和川付替以後の大規模な整地により、中世遺構のかなりの部分が破壊され、客土として運ばれることによって中世遺物もまた周辺各所に散らばったことが知られた。とりわけ旧大和川の堆積作用により形成された砂質土層を遺物包含層とするような地点では、この地層を削った客土層は自然の堆積層と層相が酷似し、また出土遺物の多くも中世土器であるために、一見して客土層とは判断し難い様相を呈している。おそらく同様の客土層は旧大和川筋の自然堤防上に立地した他の遺跡においても付替工事を契機とする同様の土地改変政策により形成されたことが容易に推定できるのである。

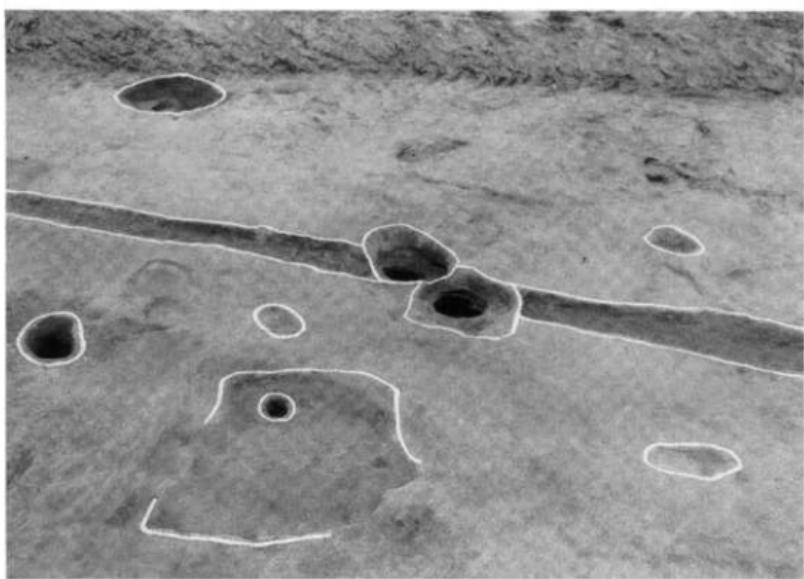


1. 調査前の風景

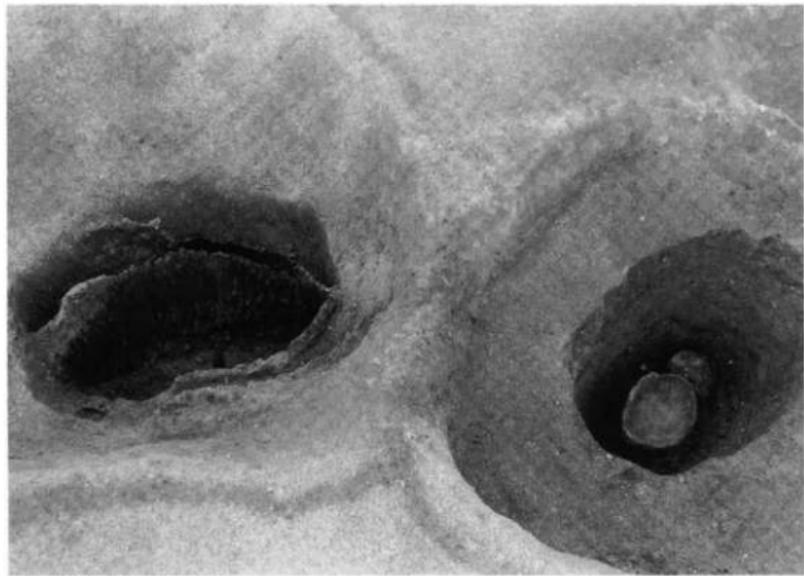


2. 調査風景

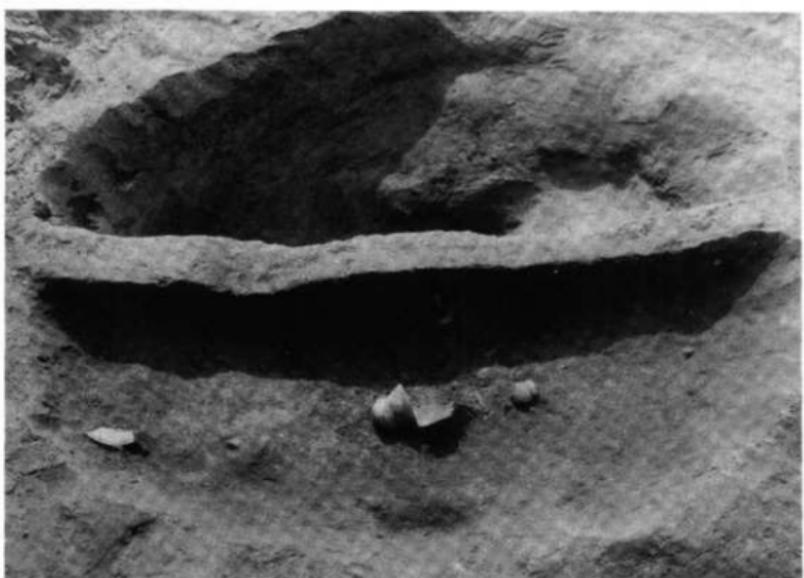
図版二 山賀遺跡



1. 古墳時代の遺構



2. 土塚1・2検出状況



1. 土壙 5. 土器出土狀況



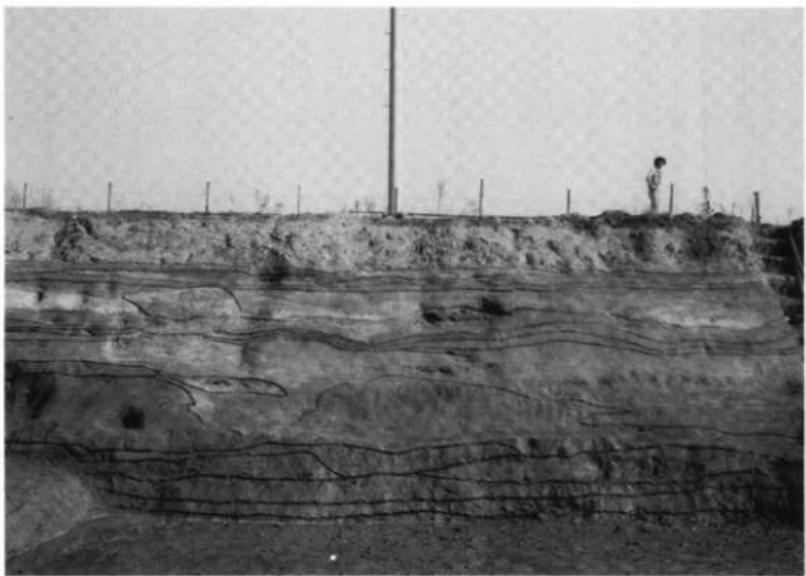
2. 土壙 4. 土器出土狀況



1. 溝 検出状況



2. 杖列検出状況



1. 調査地東壁断面



2. 盛土 1 土器出土状況



3



2



4



5



6



1

布留式甕、庄內甕



9



A



54



89

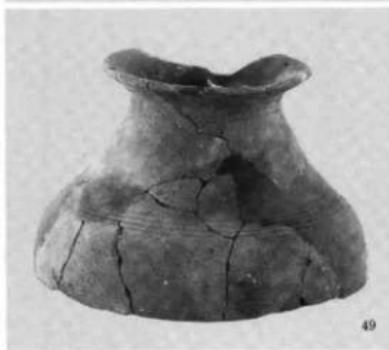
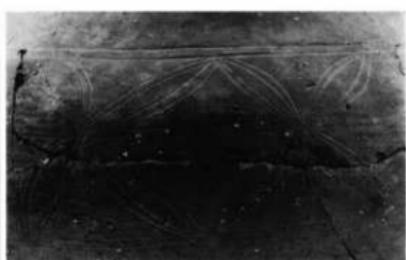


58



23

小型丸底壺、盤、鉢、長頸壺



34





53



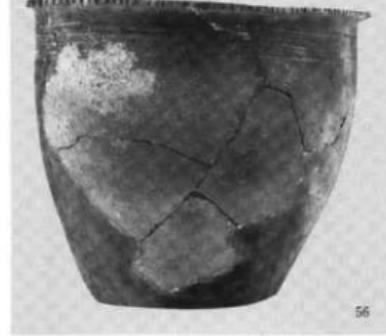
72



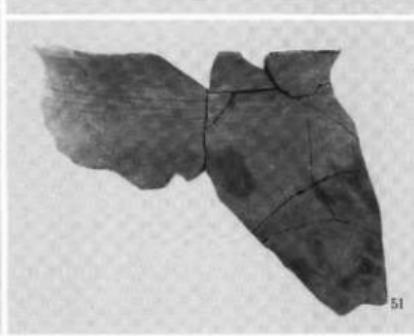
57



55



56

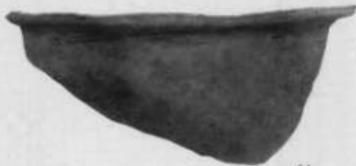


51

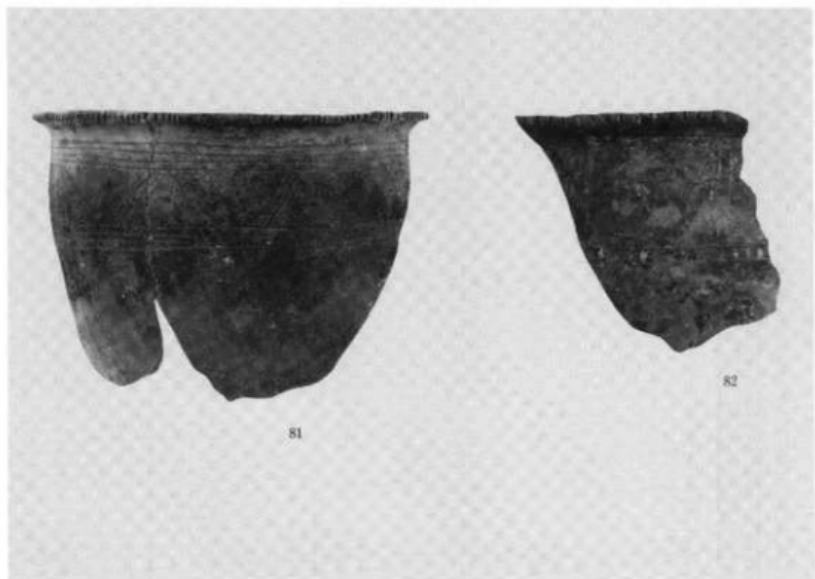
甕、大型壺



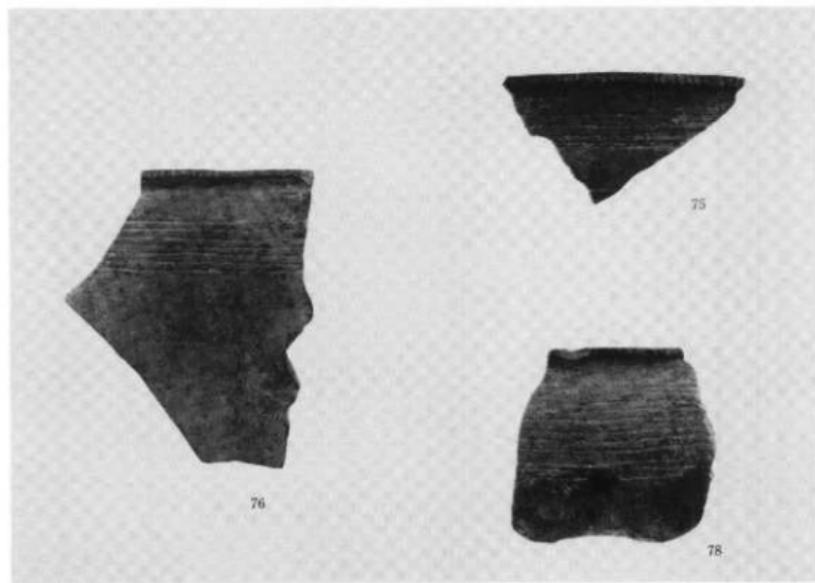
1. 壺



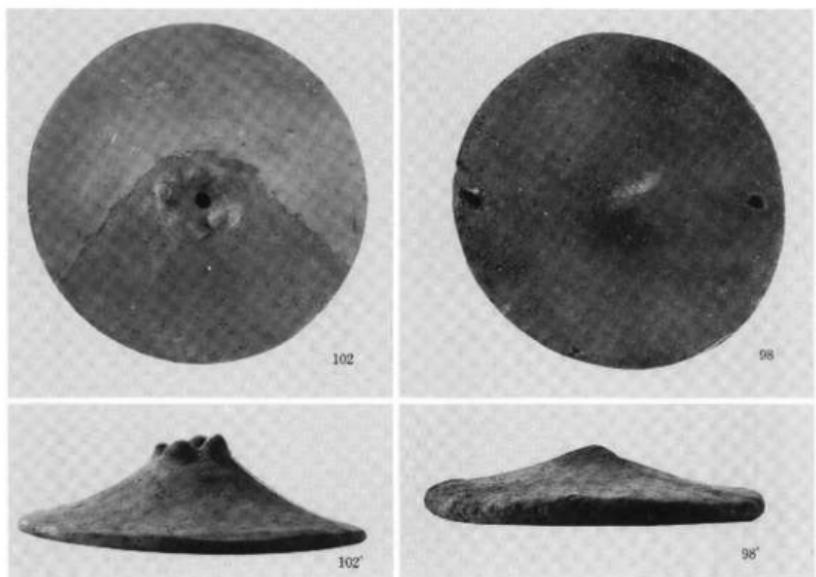
2. 艋



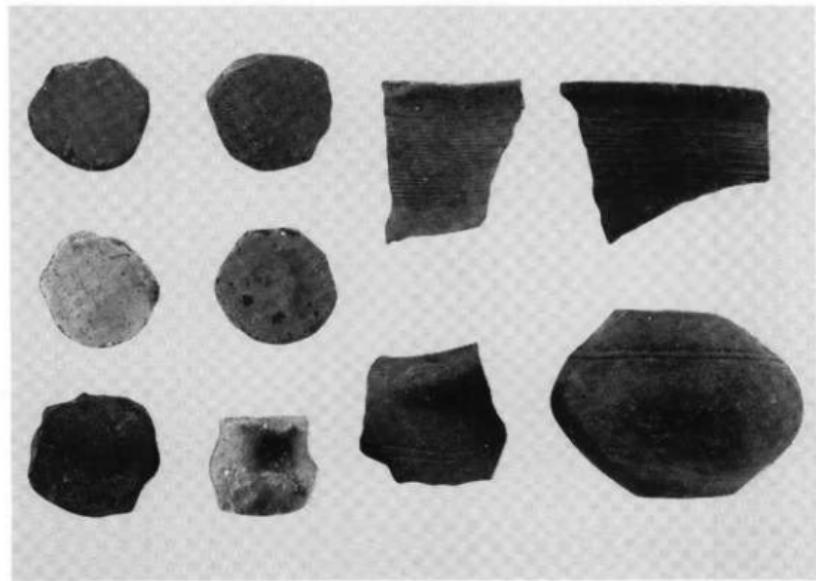
1. 瓷



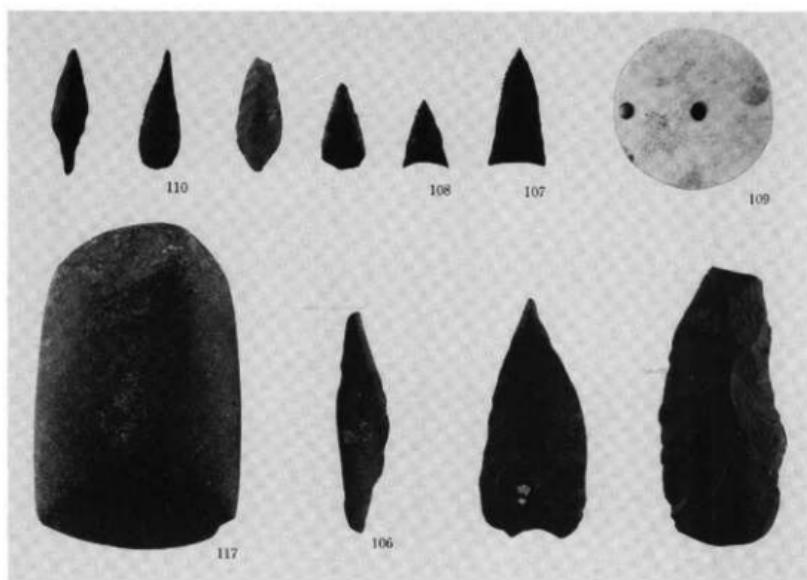
2. 瓷



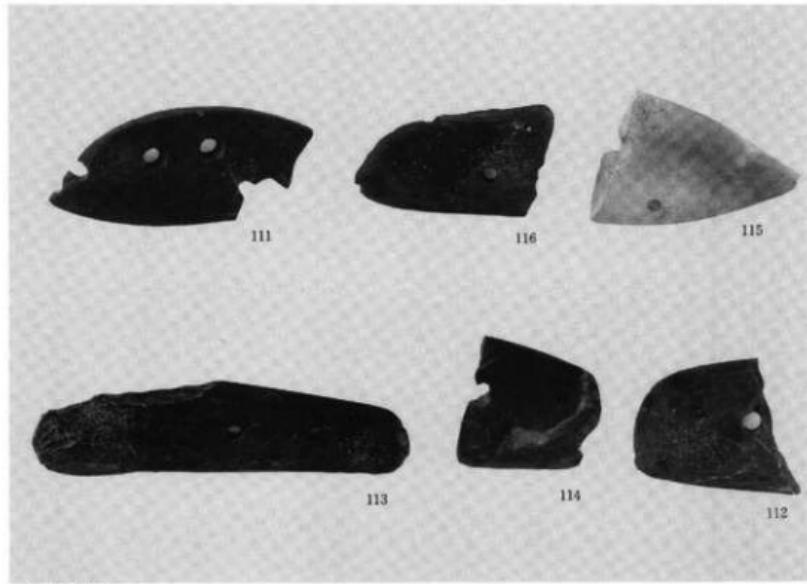
1. 壺用蓋



2. 土製円板、無頸蓋、甕、小型壺



1. 大型蛤刃石斧、石鎌、石錐、紡錘車



2. 石包丁



B

118



120



134



133



135

輪、未製容器、未製繩、手網、刺突具、不明木製品



調査地東半の遺構



井戸1



井戸4



4



5



3



6



2



7



1



8



9



10



11



12



16



31



32



33



27



34



22



溝 遺物・石出土状況



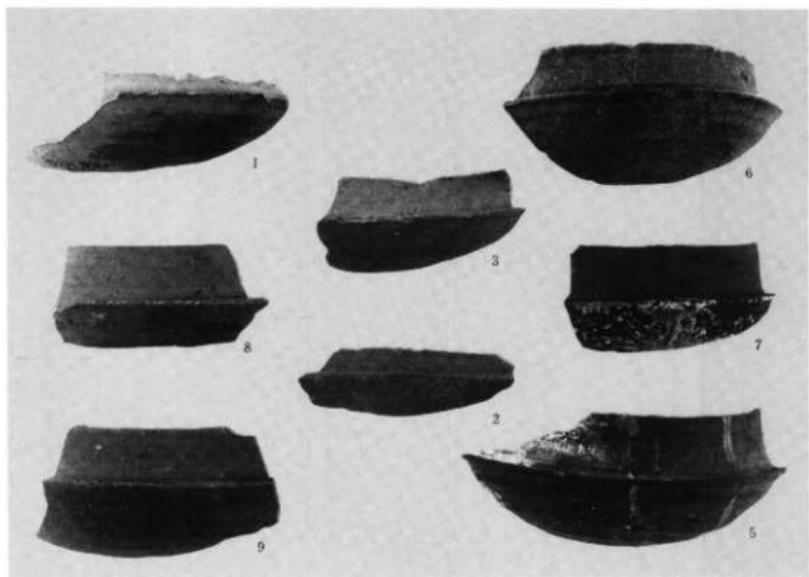
溝 遺物出土状況



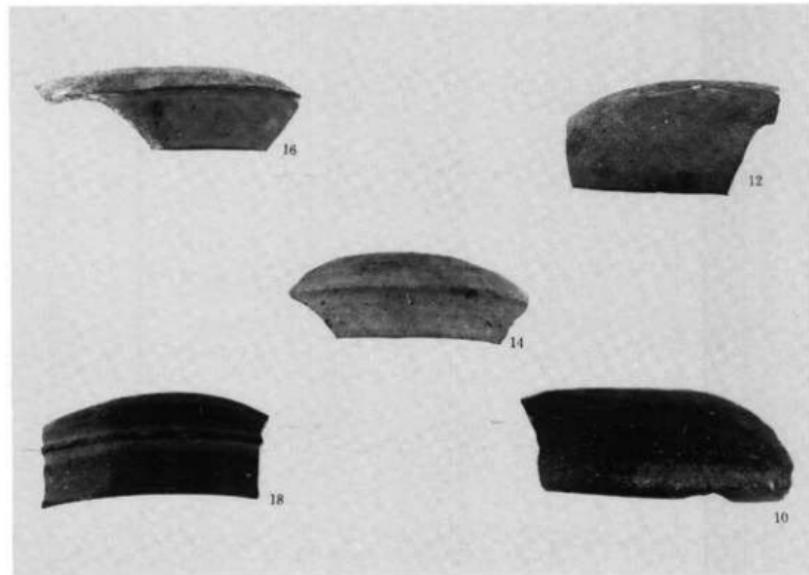
溝 遺物出土状況



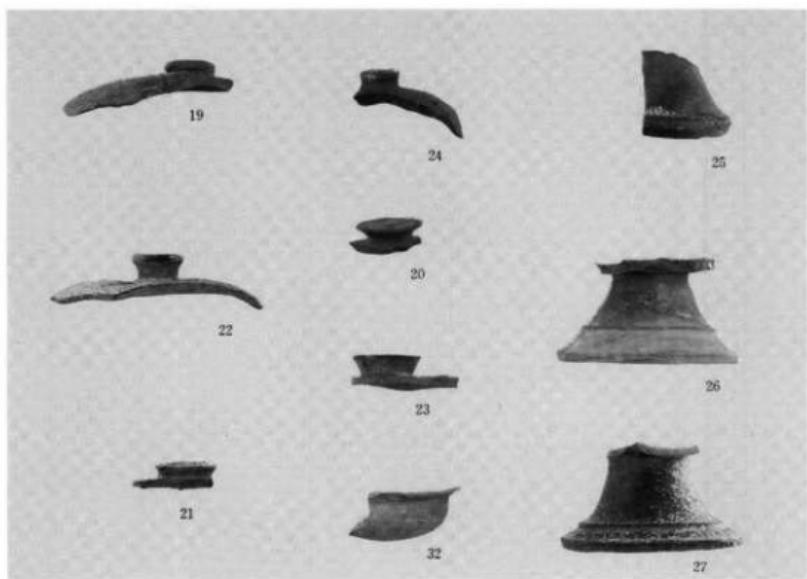
溝 遺物出土状況



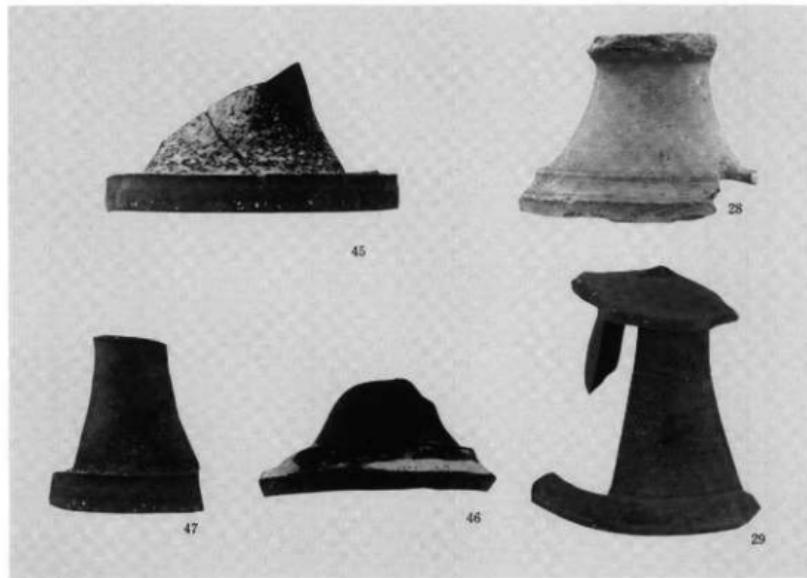
須惠器



須惠器

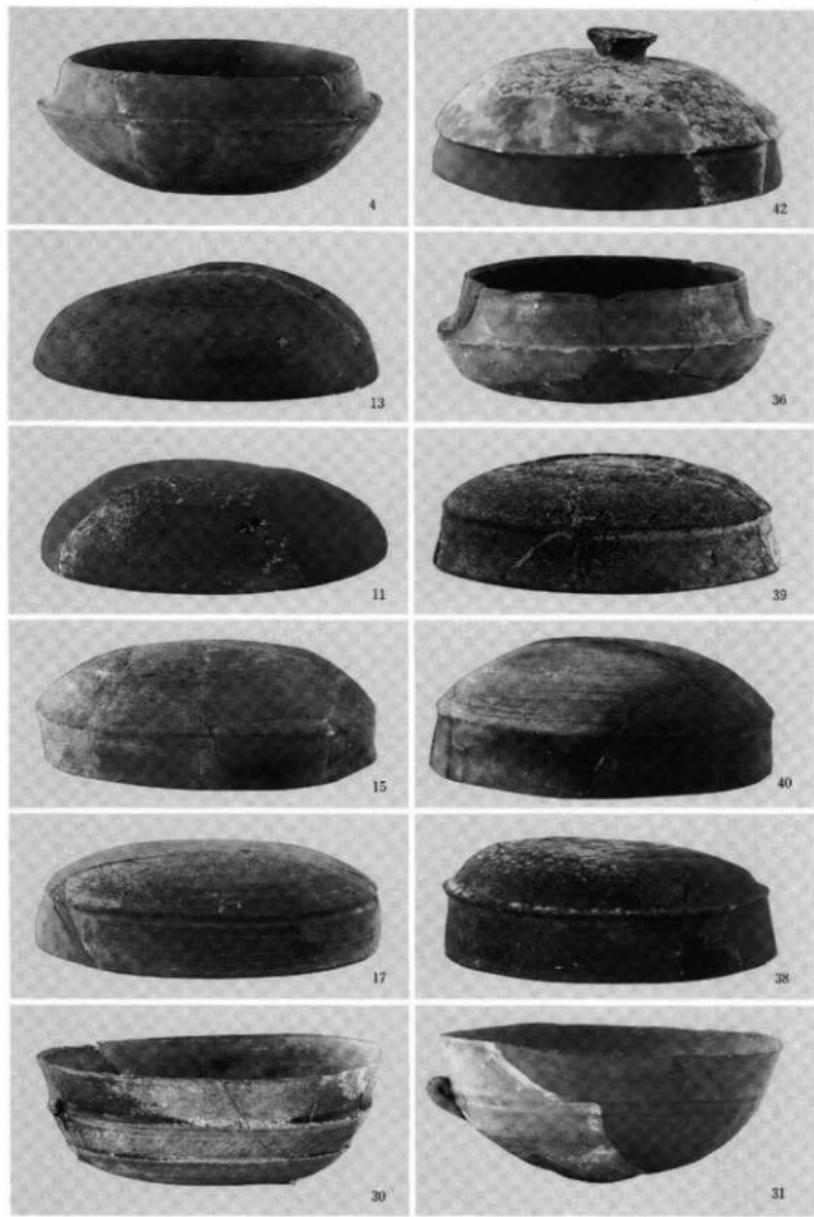


須惠器



須惠器

圖版五 繩手遺跡・遺物





43



44



49



50



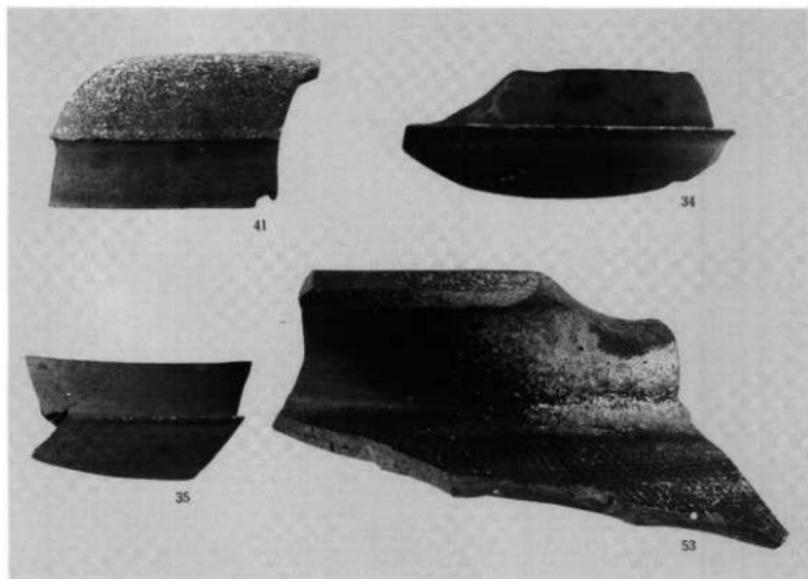
51



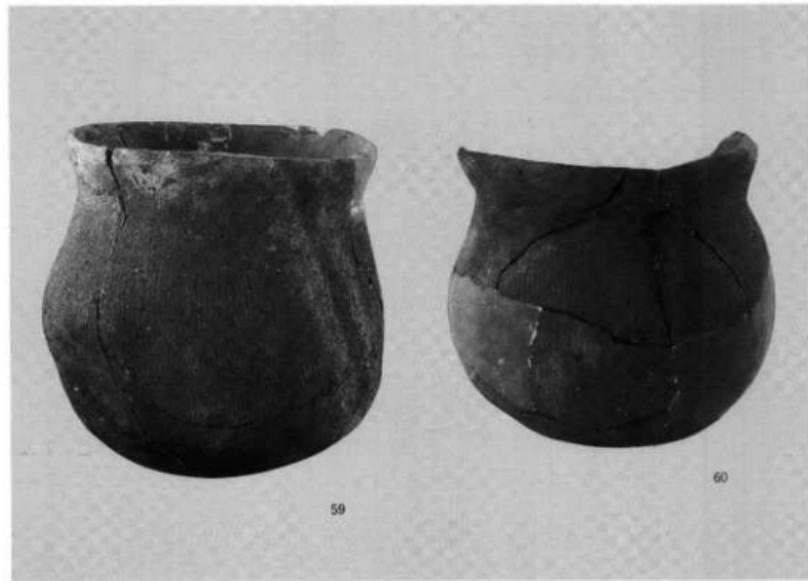
52



54

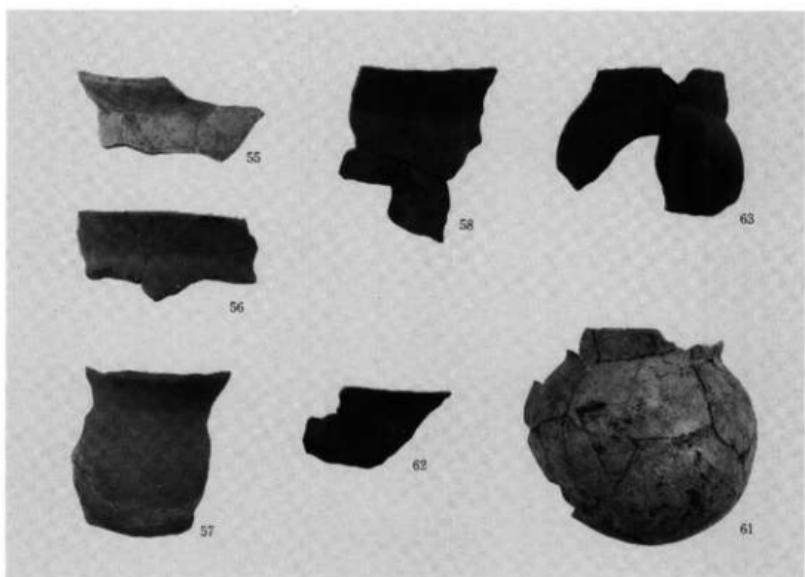


須恵器

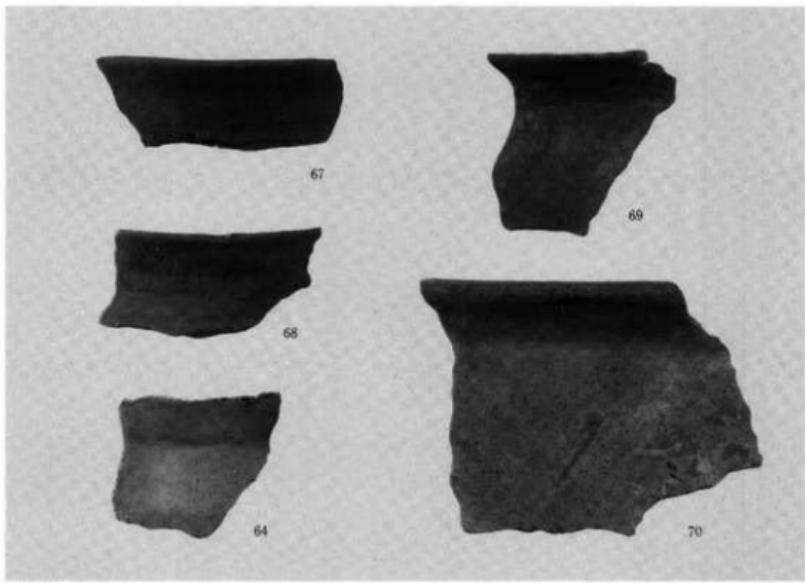


土師器

圖版八  
視手遺跡・遺物



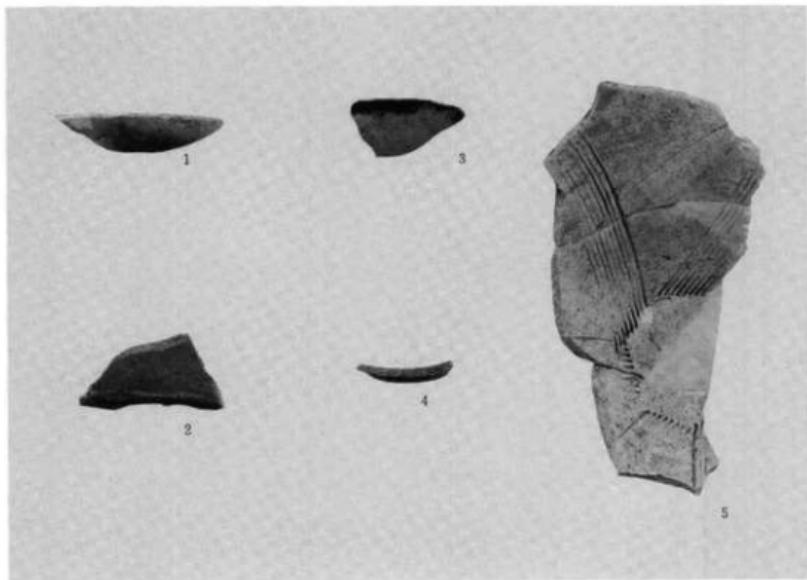
土師器



土師器



遺構全景



土師器·瓦器·陶器

山賀遺跡発掘調査概要

付 弥刀・瓜生堂・柵手・若江遺跡発掘調査概要

1990

発行 東大阪市教育委員会  
印刷 近畿印刷センター